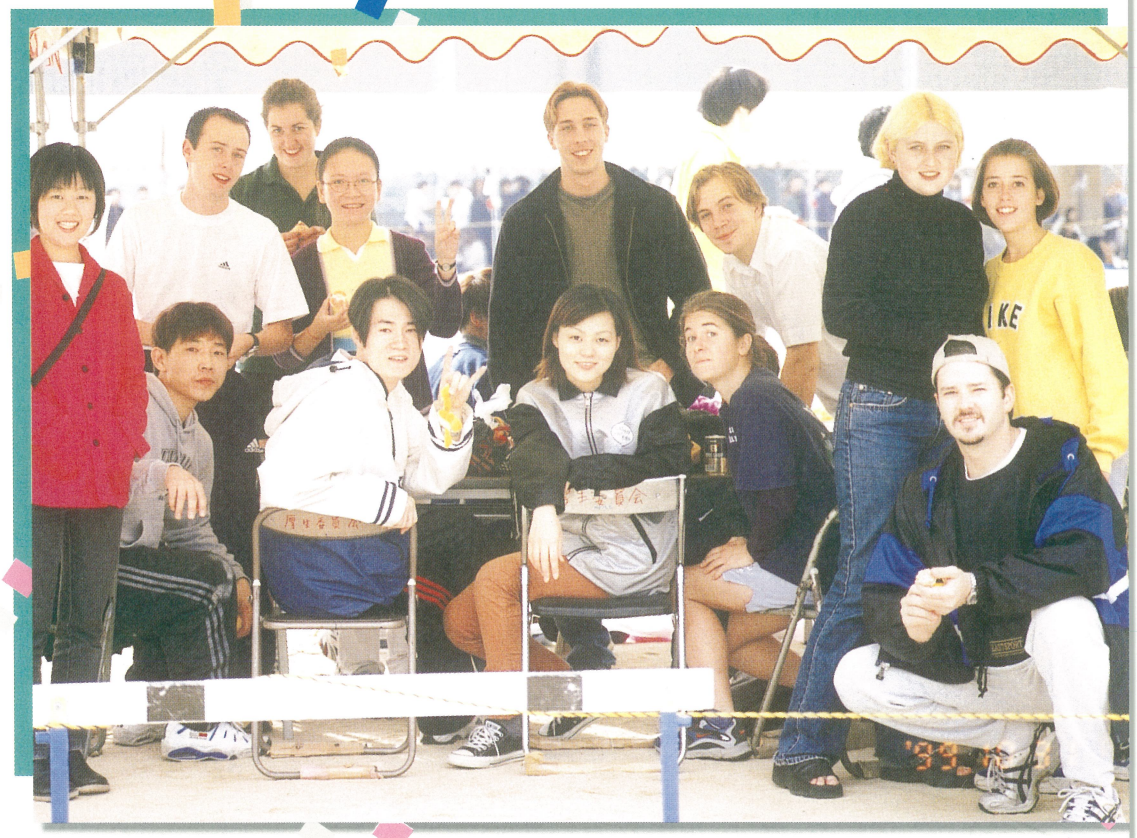
COMMERCE
MANAGEMENT
ECONOMICS
INTERNATIONAL ECONOMICS
ENGLISH
EAST ASIAN STUDIES
SOACIAL CHILDHOOD AND NURSERY EDUCATION

KGU

INTERNATIONAL EXCHANGE LETTER

国際交流レター 2000 vol.22



KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY
熊本学園大学

国際交流レター 2000 Vol.22

CONTENTS

巻頭言 国際交流委員長あいさつ

1 西園寺　明　治

協定大学国際交流 担当者のこえ

2 UNITEC　インスティチュート・オブ・テクノロジー　外国語学科長
ニック　シャックルフォード

3 中国人民大学　国際交流処処長
馮　　俊

4 北京語言文化大学国際交流処副処長
許　秋　寒

TOPICS

5 外国人留学生弁論大会

国際交流委員座談会

6 7 テーマ ①国際交流のグローバリゼーションについて
②学生交流の在り方について

教員交流

8 深圳大学　刘 荣 荣
「日本の思い出」

9 深圳大学　杨 光 辉
「忘れがたい日本の旅」

10 大田大学校　金 俊 浩
「十月の午後のコンニチワ」

11 外国語学部教授　林　日出男
「モンタナ滞在記—交換教員制度の行方」

12 商学部教授　貞松　茂
「ひとつの旅～振り返りの時間～」

13 交換教員往来

13 '99研修団往来

留学体験記

14 商学部 経営学科　小川美智子
「ニュージーランド留学」

15 経済学部 国際経済学科　上田美和
「留学生活を振り返って」

16 外国語学部 英米学科　櫻井淳也
「一人じゃなかったモンタナ生活」

17 経済学部 国際経済学科　田上瑠美
「留学報告書」

18 商学部 商学科　川畑秀貴
「変わる北京～日本の生活環境の変化を通して～」

19 外国語学部 東アジア学科　永田さやか
「桂林での留学生活」

20 経済学部 国際経済学科　大田黒洋介
「経験という宝～一年間の中国留学を経て～」

22 23 留学生交流スナップ

24 25 1999年国際交流 EVENTS

学生研修団

21 社会福祉学部 社会福祉学科　馬場由美子
「タイの生活記」

26 商学部 商学科　平川智英
「ベトナム探検隊」

留学生のこえ

27 モンタナ州立大学　テリース・タッカー
「ちょっとスピーチです。」

28 UNITEC　インスティチュート・オブ・テクノロジー
ミランダ　ドナルドソン
「一番楽しい日本の経験」

29 アルスター大学　フィリップ　ドハーティ
「日本が大好きになりました。」

30 深圳大学　吴 蔚 彬
「忘れ難い、日本。」

31 大田大学校　劉 眞 福
「良かった」

32 経済学部 国際経済学科　蒋 益 鳴
「今度、よろしい」

33 34 DATA

巻頭言 Foreword

国際交流委員長あいさつ

西園寺　明　治　国際交流委員長

国際交流委員長として、１年が経過しました。山積する課題に途惑うことが多いのですが、留学報告会での留学を体験した本学学生の自信に満ちた態度や発言、日本語によるスピーチコンテストでの来学留学生の機知に富んだスピーチなどに接すると、少しずつ毎年交流の積み重ねが厚くなっていくのだという実感を覚えます。

先に、本学の留学経験者数名との座談会に出席しましたが、その時の印象は忘れ難いものです。「留学中何が印象的だったか」という問いに、ほとんどの学生（卒業生も混じっていましたが）が「留学中は人間関係、人の親切に助けられたこと」を挙げました。彼らが研究の厳しさとか学問の大切さを一番に挙げなかった事を不満に思う関係者もあるでしょうが、私は正直なところ良かったと思いました。また、「帰国して本学を今はどう思っているか」という問いには、本学はよくやっている方ではないかという意見が多かったのも印象的でした。遊ぶ学生も、勉強に励む学生もいて、アバウトなところがむしろ良いのではないかと。留学を目指したり研究をしたい学生にはそれなりの道が用意されていて、一つの色に染められていないことが、学生には良いのかもしれません。

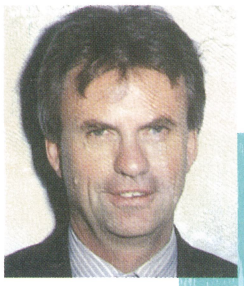
かといってもちろん、私が今の本学、国際交流態勢に満足している訳ではありません。留学出来るのはほんの一部の学生に過ぎません。１年の（交換）留学でなくとも、短期の語学留学や研修の機会がもっと多くの学生に開かれるべきですし、一定の学部に留学生が偏っている現状は無視できません。また、私費留学生を含め60名という本学への留学生数は少なすぎるというべきですし、文化背景の違う学生の存在が本学の様々な分野にもっと反映されることも必要だと感じています。

20世紀から21世紀へかけての期間に国際交流の仕事をしている訳ですが、大転換を云々する気はありません。確かに海外の大学の状況は（そして国内の大学も）生易しいものではありませんが、20世紀から21世紀への跳躍ではなく毎日のなかで繋がっていくものを追って行きたいと思います。交流が拡大・深化していくなかでも、あの座談会の学生達がもらしたような実感を、本学の将来の留学体験者から再び聞けることを祈っています。

協定大学国際交流

Sister University International Exchange

担当者のこえ



UNITEC's School of Languages is most grateful to Kumamoto Gakuen University for its co-operation in developing the Exchange Programme between our two institutions. Both universities have the aim of enabling their students to develop both their language skills and a greater understanding of each other's cultures. The exchange programme is an ideal vehicle for achieving those aims.

New Zealand is a country that is physically remote from the rest of the world but we are great travellers and actively seek business and cultural links with countries in the Asia Pacific area and beyond. We enjoy our environment and celebrate the mix of distinct cultures that make up our society. We are keen to share our lifestyle and all visitors can be sure of a very warm welcome when they arrive here. By the end of their time at UNITEC we are sure that our visiting Japanese students will have had many chances to practise and extend their English language ability and that they will return to Japan with many memories of the delights that New Zealand offers.

For our students of Japanese, this exchange programme is an exciting opportunity to visit Japan, to practise their language, to build friendships and to further an understanding of Japan that will last for a lifetime. For the students who have already spent time at Kumamoto Gakuen University, the experience has been both exciting and enriching.

We live in a global society. New technologies continually make travel and communication easier and faster and our students can now take advantage of many opportunities for overseas study in order to gain a truly world perspective. UNITEC congratulates Kumamoto Gakuen University for its international focus, and for the development of programmes and facilities that encourage this valuable interchange of ideas and worldviews.

Nick Shackleford
Head
School of Languages
UNITEC Institute of Technology
Auckland
NEW ZEALAND

＜要約＞

二大学間の留学プログラムの発展に対する熊本学園大学のご協力に大変感謝しております。両大学とも、学生に外国語の修得と異文化の理解を可能にすることを目的としています。留学制度はこれらの目的達成において理想的な手段です。

ニュージーランドは、世界の他地域から離れたところに位置しています。しかし、人々は旅行好きであり、アジア太平洋地域を初め世界各国とのビジネスと文化交流を積極的に求めています。ニュージーランドの自然環境を楽しみ、我々の社会を形成している異文化の混合を喜んでいます。ニュージーランド人は自分達のライフスタイルを分かち合いたいと思っていますので、ニュージーランドを訪れる人々は必ず暖かい歓待を受けることになります。UNITEC に留学した日本からの留学生は、英語を勉強し、その能力を伸ばす多くの機会を得るだけでなく、ニュージーランドで体験できる素晴らしい思い出を持って日本に帰国することを確信しております。

私どもの日本語専攻の学生に取りましては、この交換プログラムは、日本に行って、日本語を使い、生涯続くであろう友情を培い、また、日本への理解を深めるという素晴らしい機会を得ることになります。熊本学園大学で過ごした学生達は楽しいばかりでなく、大変豊かな経験をすることができました。

私たちは、今、グローバル・ソサエティに住んでいます。ニューテクノロジーは、間断なく旅行や通信をより容易かつ迅速にしてくれ、私たちの学生達も、真の世界的視野を手に入れるため、現在の海外留学の豊富な機会を利用することができるようになりました。熊本学園大学が世界に焦点を当て、アイデアや世界観のあるこの貴重な交換を奨励するプログラムや施設を進展させられたことに対し、UNITEC から、お祝いを述べたいと思います。

ユニテック　インスティチュート・オブ・テクノロジー
外国語学科長
ニック　シャックルフォード

迎接全球化的挑战

中国人民大学国际交流处处长　　冯俊　教授

经济的全球化和信息技术的飞速发展，给高等教育提出了新的挑战。为了迎接这种新的挑战，大学不仅在科学研究的组织方式、科学成果社会化的方式和教学方式等方面应该有一系列的根本性的转变，而且还应该比以往任何时候都更加重视大学的国际性和开放性。

经济的全球化必然带动知识的生产和传播的全球化，大学的行政管理、教学、科研、师资培养和聘任等每一方面的工作都和国际交流密不可分。国际交流不再仅仅是大学诸多工作中的一个方面，而是推动学校工作全面发展的龙头。首先，大学的科研课题的设立是与国际学术交流直接相关的。正是通过教授们的国际学术交流，参加国际会议，交换最新科研资料，了解到各个学科的世界学术前沿，才有可能确立最有价值的科研课题；同时，科研课题的组织和实施过程本身就是国际化的，往往一个科研项目的完成是多个国家的众多学者集体协作的结果。离开了国际交流和合作，科学研究的开展几乎是不可能的。其次，大学的专业设置、课程建设、课程内容的更新也是与国际交流分不开的，通过国际交流，我们可以为学校的教学改革不断地提出新的意见，否则，我们的教学将是落后的和陈旧的。第三，大学教师的培养和聘任也应该是国际化的，教师应该来自不同的文化背景和学术背景，不应该近亲繁殖；另外我们还应该经常选派教师出国进修，更新知识结构，了解世界学术前沿动态，提高师资队伍素质。第四，大学的行政管理、财务管理和后勤管理也应该不断地借鉴世界上先进的管理经验，也需要进行国际交流，否则也会是封闭的和保守的。第五，衡量一个大学教学质量和学术水平的一个重要标志之一就是看它的学生参与国际交流的程度，一方面是看学校的学生有多少人出国学习、交流和参加会议，另一方面就是看有多少国际学生即外国留学生来校学习。从以上五个方面来看，一所大学，只有把国际交流工作搞好了，它才能成为一所高水平的大学，否则，它就要落后或者被淘汰。

这几年来，我们也是从以上几个方面入手，通过国际交流推动学校工作的全面发展。我们与熊本学园大学，联合开办暑期培训项目，开设与国际经济专业相关的课程，接受熊本学园大学的学生来学习汉语和中国文化，开展教授和职员的互访等活动，这些对两校的发展都起到了积极的作用。我们愿在新的世纪里，进一步加强交流与合作，携手并肩，去迎接新的挑战。

冯俊

グローバル化の挑戦を迎えて

中国人民大学教授
国際交流処処長　馮　　俊

経済のグローバル化と情報技術の飛躍的発展により、大学教育は新しい挑戦を迎えている。こうした新しい挑戦の前で、大学は科学研究の組織作りをはじめ、研究成果の社会化、教育方法の改革などさまざまな面において根本的な変革が迫られるだけでなく、以前にもましてより一層の国際化と対外開放が求められている。

経済のグローバル化は必然的に知識の生産と伝達のグローバル化をもたらす。そのため、大学では、行政管理、教育、研究、教員の養成と採用など、どの部門も国際交流とますます密接に関係してくる。国際交流はもはや単なる大学事務の一部門ではなく、むしろ大学全体の発展を牽引する機関車の役割を果たしている。まず、研究課題の設定は国際交流と直接関係している。大学の教員は国際会議への参加や、最新の研究成果の交換などの国際的交流を通じて、それぞれの研究部門の最先端の情報を持つことによってはじめて価値のある研究課題を設定することが可能である。他方、研究課題の設定と実施の過程も国際的に行われることが多く、研究は多くの国々の大勢の研究者の参加のもとで成し遂げられる。国際的な交流と協力がなければ研究が不可能な場合さえある。次に、大学の学科、コースの設置、教育内容の改革も国際交流と密接に結びついている。国際交流を通じて大学に対して常に新しい改革案を提示することがなければ、大学の教育は時代遅れになりかねない。第三に、大学教員の養成と採用も国際的に考えなければならない。教員組織には多くの異なる文化的、学術的背景を持つべきで、同系統同士の集まりであってはならない。また、教員を海外に派遣し、知識構造を更新させ、世界最先端の学術動向をキャッチすることによって、常に教員の資質を高める努力を図らなければならい。そして第四には、大学の行政管理、総務管理なども絶えず世界の進んだ経験を学び、国際交流を行う必要がある。そうでなければ、その管理は閉鎖的で保守的になりがちであろう。第五には、大学の教育、研究レベルを評価する重要な基準の一つに、その大学の学生の国際交流の参与度が挙げられる。これには自学から海外へ出かける学生の数と、海外から自学に来る学生の数の二つの側面がある。以上五つの面から見て、国際交流の進んでいる大学こそレベルの高い大学となり、そうでなければ遅れて、いずれは淘汰されるであろう。

まさに以上のような考えから、中国人民大学は近年国際交流を通じて大学の全面的発展を図ってきた。熊本学園大学とは共同で夏季の短期研修コースを作り、国際経済関係の科目も開設し、熊本学園大学の学生を受け入れるほか、教職員の相互訪問も盛んである。これらの交流は両大学にとってきわめて有益的であり、新しい世紀においてもより一層交流を深め、協力しあって、新しい時代の挑戦を迎えたいと思う。

For the 21ST Century's exchange with KGU

北京语言文化大学国际合作与交流处副处长 许秋寒

在有幸拜读了贵校《国际交流 Letter Vol 21》中的部分文章后，我深深感到，在新世纪即将到来之际，如何适应时代的发展，加强国际交流与合作，是大家所共同关心的问题。北京语言文化大学是中国唯一的一所以外国留学生为主的大学，为了加强对外交流与合作，我校对学校的对外交流机制进行了改革，新成立了国际合作与交流处。

我认为，作为大学之间的国际交流与合作，主要应该包括人员性的交流与合作和物质性的交流与合作两种，我所说的物质，主要是指哲学意义上的物质，即独立于人的意识之外的客观存在，也就是说，物质性的交流与合作，也包括信息的交流和知识性成果的交换。具体来说，我校计划今后大力加强与外国教育机构的留学生交流、教师的交流，同时，也将致力于与外国大学的互相承认学分方面的工作。

熊本学园大学与我校有着交流协定，今后，贵我两校的交流与合作应该进一步发展。例如在互相派遣留学生、教师方面，在互相承认学分方面，在发展远程通信教育方面等等。我衷心希望，在进入新世纪后，贵我两校的交流与合作能够有一个大的发展，出现一个崭新的局面。

21世紀の KGU との交流に寄せて

北京語言文化大学国際交流処副処長　許　秋　寒

貴大学の『国際交流 Letter Vol 21』に掲載されたいくつかの文章を拝読して、これからの新しい時代において、いかに時代の要求に応えて、より一層国際交流と協力を推進していくかについては、我々が共通に関心を持つ課題であると強く感じた。北京語言文化大学は中国唯一の外国人留学生教育を中心とする大学で、このたび、国際交流と協力をさらに推進するために、本学では対外交流組織を改組し、新たに国際協力と交流処が設置された。

大学間の国際交流と協力には、人的交流・協力のほか、物的交流・協力も含まれると思う。ここでいう「物的」とはつまり哲学的な意味における物質、即ち人の意思から独立した客観的存在のことを言う。従って、物的交流と協力には情報と知的成果の交換が含まれる。具体的にいえば、本学として今後さらに外国教育機関との学生および教師の交流を強化するとともに、外国の大学との間の単位互換についても積極的に進めていきたいと考えている。

本学と熊本学園大学の間は交流協定を結んでおり、今後学生、教員の相互派遣をはじめ、単位の互換、さらに遠距離通信教育など、いろいろな面における両大学の交流協力関係のさらなる発展を期待したい。新しい世紀にはいって、両大学の交流関係がより大きく発展し、新しい局面を迎えることと信じている。

外国人留学生弁論大会

国際交流委員会主催による「第９回外国人留学生弁論大会」が，11月27日（土）午後、学生会館４階の大ホールを会場に約100名の聴衆を集め開催された。

同大会は、本学に在籍する外国人留学生が、日本での生活の中で感じたことや考えさせられたことを日本語で発表し、学内外の国際理解を深めてもらおうと毎年行っているもの。

今回は中国、韓国、英国、米国、ニュージーランドの留学生11名が参加。出場者は、滞在期間の長短に関わらず流暢な日本語で熱弁をふるった。

審査の結果、最優秀賞には「日本の若者」と題して話した商学部３年の吳蔚彬さんが選ばれた。

審査結果は次のとおり

賞	姓　名	出身国	所　属	弁論テーマ
最優秀賞	吳蔚彬（ゴ イ ヒン）	中国	経営学科３年	『日本の若者』
優秀賞	劉眞福（ユ ジン ホック）	韓国	社会福祉学科４年	『外国へ行ったら誰でも障害者』
	Miranda Donaldson（ミランダ ドナルドソン）	ニュージーランド	国際経済学科２年	『男女平等の必要性』
特別賞	趙暁明（チョウ ショウ メイ）	中国	経営学科学部研究留学生	『便利な国、日本。しかし…』
	欧阳如（オウ ヤン ルウ）	中国	経営学科４年	『青春』
	梅冬青（バイ トウ セイ）	中国	商学科２年	『ここを習うべき』
努力賞	Annie Liang（アニー リアング）	ニュージーランド	国際経済学科２年	『私にとっての日本の音楽』
	Helen Byers（ヘレン バイヤーズ）	イギリス	国際経済学科３年	『日本に来て感じたこと』
	David Antich（ディビッド アンティチ）	アメリカ	国際経済学科３年	『日本とアメリカの映画』
	Eddie Barth（エディ バース）	イギリス	国際経済学科３年	『健康と環境を考える食事』
	王萌（オウ ホウ）	中国	商学科３年	『留学するとは』

国際交流委員座談会

テーマ ①国際交流のグローバリゼーションについて
②学生交流の在り方について

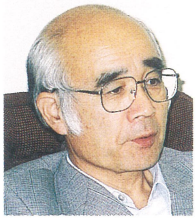
出席者

西園寺　明　治　委員長
今　村　寛　治　委員
小　城　義　也　委員
佐　藤　勇　治　委員
ジョセフ・トウメイ　委員
マング・マング・ルウィン　委員
田　中　和　穂　国際交流センター事務室長

西園寺委員長「まず、国際交流のグローバリゼーションについて、委員の皆さんのご意見を伺いたい。先日米国の協定大学であるインカーネットワード大学中国分校の開校式に出席した。その大学では中国はもとより、韓国、カナダなど世界各国から学生を集め、文化と言語を教える。グローバリゼーションの一つであるとのこと。」

ルウィン委員「本学の国際交流プログラムは、お互いの友情を深め、教育的なプログラムを準備している。また大学全体で国際交流を進めるべきとの観点から学生、教員、職員のそれぞれの国際化を進める必要があり、その努力をしている。そして学術的にはユニコン委員会が発足して2年、ようやく国際シンポジウムが開催できた。これらを考えると本学の国際交流は他の大学と比べて進んでいるといえる。しかし本学は大学院を設置して10年以上経つが、未だ大学院生の国際交流プログラムがない。大学院でも提案しているが、進展がなくその点が残念である。」

小城委員「英語には国際化という言葉はなく、ここではグローバリゼーションが適当な言葉である。本学は大学対大学の交流が進んでおり、本学の国際交流は進んでいるといえる。この流れは良いのではないか。」



佐藤委員「グローバリゼーションには二つの意味があり、一つは世界が共通の基準や言語や価値観が標準化されること。もう一つはお互いの違いを認識した上で何ができるかを考えることではないかと思う。例えば本学で、英語の授業を開講し、外国から研究者や学生を自由に受入れる形を作ること。また世界に目を向けるという点では、現在交流している地域のみならず、できるだけ多くの地域、ヨーロッパ、アフリカ、南米と交流する必要も将来出てくるのではないだろうか。」

トウメイ委員「内側からのグローバリゼーションが大切。本学では次の3つがポイント。留学生の受け入れ、本学の学生の派遣、そして学内における組織同士のコミュニケーション、例えば海外事情研究所と国際交流委員会など、お互い外国との交流について知らないことが多い。」

西園寺委員長「本学の国際交流で進んでいない部分とすれば、やはりその海外事情研究所との関係があると思う。」

トウメイ委員「また県内で考えると本学、熊本大学、県立大学で大規模なシンポジウムを開催するのもおもしろい企画になると思う。」

西園寺委員長「内部を流動化して、風通しをよくすることは、外部とのつながりにも関連がある。」

今村委員「グローバリゼーションのグローブは地球の意味で、日本から遠い欧米に行き、実際にその土地に行ってみると、我々とは異なる人々も同じ地球上にいるのだという親近感がある。実際にその土地に行かないと分らないところがある。本学には学生に様々な機会が与えられていて、その意味でも本学のグローバリゼーションは進んでいる思われる。「日産」はフランス人が社長で、社内は英語が公用語となっている。もちろん英語だけが言語ではないが、地球語としてビジネスの世界では英語の価値が高まっている。学生には卒業して社会では英語は生きていくために必要だということを実感してほしい。」

田中室長「本学は7カ国14大学と交流があるが、本学の規模を考えるとこれでいいのか、検討の余地はあるのではないだろうか。しかし、在学生と高校生を対象にしたアンケートの中で、本学への入学を希望した理由で「国際交流が活発だから」と回答した学生が多く、上位にランクされている。これからも本学の交流活動が知れ渡ってきていることがうかがえる。ただし、グローバリゼーションということで考えると現在の交流地域で十分かというと疑問が残る。またこれまでは学生交流が中心だったが、今後は一層学術交流も充実していく必要があると思う。」

西園寺委員長「特徴的なのは本学の国際交流はある程度進んでいる。学生のアンケートからもそれが裏付けられているように思える。」

ルウィン委員「しかし留学生と本学学生との交流については、

まだまだ弱い部分があるように思う。」
トウメイ委員「学生のタイやヴィエトナムの研修はあるが、外国語研修センターにはそのようなタイ語やヴィエトナム語の講座はない。現在のセンターをもっと充実できればと思う。」
西園寺委員長「前半をまとめたい。本学の国際交流はがんばっているのではないか。しかし一つの問題としては、交流地域が十分かどうか。もう一つは本学を地球規模で考えた時に、本学全体の中で留学生の割合を考えると少ないのではないかという点。それから学術的な部分での交流、学内組織同士のコミュニケーション、職員の交流などが課題であると思う。次に後半として学生交流の在り方についてお話し頂きたい。」
ルウィン委員「留学生の受入れで、学生数全体でみるとそれほど数は多くない。留学生が受講できる科目が限られている。英語で授業ができる先生はたくさんいるので、協力をお願いして英語での授業科目が増えれば、留学生が増える可能性もある。交流大学についていえば、現在の大学間交流協定でのやり方は厳しすぎる。もっと簡素化して、いろいろな地域の大学と協定を結び、必要な時に交流できるような方法がより良いのでは。」
西園寺委員長「留学生を区別化することで、学内が国際化されていない。制度として留学生が受講したり、先生や学生と接触できるものがない。学内を国際化していく必要がある。」
トウメイ委員「本学は留学生の受入れで、留学生に甘いと思う。彼らのために日本人と区別すると益々現状に甘えてしまう。授業では3名ほどの先生しか留学生が英語で受講できる科目がない。本学には他に英語で授業ができる先生がいるのにもったいない。また本学の学生は来日している留学生と出会う機会がない。なんらかの機会を計画する必要がある。」
小城委員「商学部の学生にも留学の制度を活用してほしい。もちろん基準を満たす努力は必要。来日中の留学生とも商学部の学生が交流できるような制度が必要。留学生に英語の授業に参加してもらえば、学生が日常的に英語を実感できる。このような実際に英語を使って体験できる場を作ることで、学生がより留学などに興味を持つような気持ちにしていくことが大事である。」
西園寺委員長「これは現制度の中で、できてしまった暗部ではないだろうか。どうしても実力の違いからこうなってしまっているが。」
今村委員「ヴィエトナムに学生研修団の引率で行った際に感じたが、ヴィエトナムには日本語を学ぶ優秀な学生が多い。そして日本へ行きたい、留学はどうするのかなどの質問を多く受けた。本学の学生と比べるとレベルも高く、やる気もある。来年は1名来日予定だが、財政的な問題があるかもしれないが、受入れ人数をもっと増やせたらいいと思う。」
西園寺委員長「非常に重要なことで、検討していってもいいのではないか。」
ルウィン委員「本学の奨学金だけではなく、ロータリークラブなどの奨学金もある。本学から1名分奨学金を出し、もう少し探して他からもう1名分の奨学金をもらえれば留学生を呼ぶことができる。」
西園寺委員長「財政の問題があり、奨学金をもらえることが確実でなければ、なかなか呼ぶのが難しい。」
ルウィン委員「私達は交換留学生の事ばかりを考えるが、私費留学生の受入れはかなり遅れていると思う。もっと体制を整えれば、より多くの留学生が来るのではないか。」
西園寺委員長「私費留学生の授業料を安くするとかできないか。」
田中室長「授業料の半額を免除している。」
ルウィン委員「そのことをもっとPRすべきだと思う。」
トウメイ委員「学生交流を始めようとする際の協定締結までに、あまりにも時間がかかりすぎる。そこでとりあえず2年間だけ交流してみる、というような仮の協定を結んで交流してみる形をとれば、より進むのではないか。」
佐藤委員「留学生の受入れで、特別扱いをする部分と普通に扱う部分を明確にした方がよい。困ったことや助けが必要なことは特別に扱うが、その他については日本人の学生と同様に扱う。そのような考え方、制度を整備した方がいいのではないか。」
今村委員「友人が留学していたが、その大学には100ヶ国以上から学生が来ていたとのこと。その対応をどうしているのか、ちょっと考えられない。」
トウメイ委員「留学生を大学院でも受入れできればいいが。」
西園寺委員長「本委員会では大学院の交流は守備範囲ではないが、何かしなければならない問題である。」
ルウィン委員「実際に今年の留学生に大学院生がいて、個人的に大学院の授業を受けてもらった。」
トウメイ委員「外国語学部にも大学院ができるので、今後パンフレット等でPRできる。」
西園寺委員長「留学生の送り出しについてはいかがだろうか。長期、短期留学、研修団とある。また長期留学では英語圏への派遣が多いように思うがいかがだろうか。」
トウメイ委員「現在の長期の交換、または短期複数の交換がよいのでは。他のヨーロッパの大学は言語も違うし、大学のレベルが高く、交流は難しいのでは。」
佐藤委員「大学生と高校生で異なるが。高校生留学を進めている組織で、20年ほど前に60カ国の非英語圏にも学生を送るようになった。現在では応募者が増え、地球規模の派遣となっている。目的や扱い方の設定により異なった考え方もできる。」
田中室長「経済学部や外国語学部では海外研修を実施している。委員会主催で、全学部の学生を対象とした研修を企画してはどうか。商学部からも研修参加者がいれば、将来長期留学希望する学生が出てくるかもしれない。」
小城委員「商学部ではゼミ単位で海外へ行くケースもあるが、そのような研修があれば留学などへの土壌ができるのではないか。」
西園寺委員長「委員の皆さんには2つのテーマでお話しいただき、ありがとうございました。」

教員交流

日本の思い出

深圳大学　刘 荣 荣

日 本 随 想

在１９９９年樱花盛开的季节，我作为深圳大学与熊本学园大学的交换学者来到日本，进行为期半年的中国语教学工作。在日本生活的日子里感受颇多：从不知到知之，从感性到理性，亲身体验了日本的风俗民情。现在回忆起来，这些情景仿佛就在我的眼前。

首先，两国文化渊源流长。从走下飞机那一刻起，机场周围的方块汉字减少了我的陌生感。在讲授中国语课程中，当我与人交往碰到语言障碍时，汉字成了我们沟通的工具。尤其是中国的古汉字一直融合在日本文化中，这笔“文化财”是我们两国历史渊源流长的见证。

其次，是日本的环境保护和交通网络的建设让我感觉到生态环境与国家现代化是能协调共存的。我们到过阿苏山、菊池溪谷、立田山自然公园。所到之处，不是绿草成茵，就是古树参天，溪水潺潺；湛蓝的天，翠绿的地，每个人都在享受到大自然给予人类的恩赐。当然这也需要人类精心地呵护。日本的乡村是这样，城市也是如此。东京、大坂以及熊本市街道整洁干净，绿树丛荫，鲜花交替开放，见不到尘埃和污染。城市之间的交通四通八达，既方便人们出行，又为经济的发展奠定了良好基础。日本经济的发展，不以牺牲环境为代价，是非常值得我国借鉴的。

最后，是日本人的谦和以及对工作的兢兢业业给我留下了深刻的印象。从我踏上日本国土那一刻到以后的半年中，我真切地感受到国际交流中心全体职员和熊本学园大学教师给予我的热情关怀和照顾，使我愉快地度过了半年的时光。无论是在办公室或是公共场所，彬彬有礼、热情待人似乎是日本国民的本能，我想这与国民普遍受教育和良好的民族传统是分不开的。教育提高了国民的素质，为日本经济发展打下了扎实的基础。谦和、勤奋、严谨的工作态度为经济腾飞插上双翅，使日本成为第二次世界大战之后工业最发达，国民生活水平最高的国家之一。同时，我还认识到日本人民是热爱生活和向往和平的。在长崎和广岛的和平公园里，我们看到成千上万只祈求和平的白鸽，也感受到战争在人民生活中留下的阴影。我相信两国人民都是希望和平、反对战争的，这也是两国人民友好的基础。

在熊本学园大学，从教研室到教室，从图书馆到宿舍，看似平淡的工作和生活，其实是对日本风土人情、校风学风的亲身体验。这种国际间的交流，有助于打开互相了解和学习的窗口，对提高双方的学术水平是非常有益的。日本朋友的音容笑貌、日的樱花、熊本学园大学的银杏会永远留在我美好的记忆中。

深圳大学经济学院　刘荣荣
２０００年9月２６日

（右端から２番目が筆者）

日本の思い出

深圳大学　刘　荣　荣

1999年、桜が満開するなか、私は深圳大学と熊本学園大学の交換教員として日本に来て、半年にわたる中国語教育の生活をはじめた。日本にいる間多くの感想を覚えました。日本について少しずつわかるようになるにつれて、日本に対する認識も単なる感性的なものから徐々に理性的なものへと深めてきました。今思い出すと、まだ昨日のことのように目の前に浮かんできます。

長い共通の文化背景のお陰で、飛行機を降りた瞬間から、空港周辺の四角い漢字によって、私の異国に対する違和感を大きくやわらげられました。教室で学生との交流に言葉の不便を感じたとき、漢字はいつも恰好の道具となってくれました。特に中国の古い漢字はずっと日本文化のなかで溶け込んでおり、この貴重な「文化財」は両国の長い交流史の証である。

日本の環境保護や交通ネットワークの構築から、私は生態環境と国の近代化が両立できることを見せられました。私は阿蘇山、菊池渓谷、立田自然公園に行きました。いたるところ草原と林と清流があり、空が青く澄み切り、大地はどこまでも緑に覆われています。人々は誰もが思い存分に大自然の恵みを満喫しています。言うまでもなくこれには人々の細心の注意と保護が必要でした。この点日本では地方だけでく都会でも同じでした。東京、大阪および熊本の市街はどこも清潔で、緑が多く、どんな季節でもその季節の花がさまざまに咲き乱れる。埃や汚れた空気など殆ど見あたりません。都市間の交通が高度に発達し、人々の行き来はきわめて便利である、もちろんこのことは経済発展の不可欠な基礎にもなっています。環境を犠牲にしない日本の経済発展はわが国にとって大いに学ぶべきところである。

日本人の仕事に対する真剣な態度も、私にとって忘れられない印象の一つとなりました。私が日本の国土に足を踏み入れたときから半年間、国際交流センターの皆さんはじめ、熊本学園大学の先生方からいろいろと親切にしていただき、お陰で半年を楽しく過ごすことができました。職場でも、公共施設でも、日本人はみんな礼儀正しく、親切で温かい。これは国民の高度な教育普及率と、民族の良い伝統によるものだと思います。教育によって国民の素質が高められ、このことはまた日本の経済発展にとって堅実たる基礎を作り上げました。きっとこのような謙虚で、勤勉で、折り目正しい国民性が経済の発展にとって大きな原動力となり、日本を第二次世界大戦後工業が最も発達し、国民生活水準がもっとも高い国に作り上げたに違いない。同時に、私は日本国民が生活を愛し、平和を愛する一面を見ることもできました。長崎や広島の平和公園では、平和を祈る何百、何千の白い鳩を見て、戦争が国民生活に残した黒い陰として見えました。中国と日本両国の人々はみんな平和を愛し、戦争に反対する国民と信じている。このことこそ両国民の友好の基礎である。

熊本学園大学にいるあいだ、毎日は研究室から教室へ、そして図書館から宿舎へと、淡々と過ごした日々のように見えますが、こういった時間こそ私にとって日本の風土、人情、校風を理解するための良い時間となりました。国際交流は相互の理解にも、そして双方の学術研究にとってもきわめて有益なことだと思います。日本で出会った皆さんの笑顔、日本で見た桜、そして熊本学園大学のキャンパスの銀杏並木、これらはどれも美しい思い出とともに私の記憶の中にいつまでも残ることでしょう。

2000年９月26日

（1999年４月～９月　交換教員として受入れ）

忘れがたい日本の旅

深圳大学　杨 光 辉

难忘的日本之行

深圳大学 交换教师
杨　光　辉

尚未等到迷人的樱花季节到来,就离开了日本. 结束了我作为交换教师的生活。如今. 对熊本学园大学半年的生活非常怀念。在熊本期间,学校对我给予了非常周到的安排,让我参加了许多丰富而有趣的活动,结识了很多十分友好的朋友,还有那么多关心和支持我的老师和朋友们,令我终生难忘。回想这半年的生活,时间虽短,但感受非常深,收获也很大。

刚到熊本时、熊本的城市建设外表看来,似乎没有深圳那么有现代气息,但熊本城市的安宁、舒适,带给了我富有田园诗意的生活。这里,空气清新,环境怡人,街道干净整洁,交通方便快捷,人们的生活质量很高,生活条件优越,让人感到她是一个适宜生活的好地方。

在熊本,所到之处,我看到人们文明礼貌的举止,轻言细语的交谈,友善亲切的笑容,整个社会十分和美、融洽、怡然、有序。在所工作的场所,无论是政府部门还是各类企业,看到的都是规范的管理、让真细致的工作、优质的服务与高度的敬业精神,特别是外出考察时,我专程到了东京、大阪、京都、神户、奈良等地,这些地区,高度发达的交通,各种便利的设施,还有那高水平的现代化的管理,都给我留下了深刻印象。具有日本典型特征的文化,例如温泉、塌塌米、生鱼片、相扑、和服、茶道等的体验,也给我留下了美好而富于新意的印象。

在熊本学园大学的半年间,学校为我的教学和研究工作提供了很好的条件,教课之余,我常在图书馆浏览丰富的资料,在办公室学习日语或使用INTERNET了解外面的世界。在信息技术突飞猛讲的时代,如何充分利用现代信息技术为人类社会的进步和人民生活水平的提高服务,需要给予更多的关注。在从事管理信息系统的研究中,我感到日本社会的信息化程度,尤其是管理信息技术,处于世界先进水平和领先地位。

国际交流使我接触到了贵国的文化,加深了对日本这个国家和人民的了解,思想观念有所触动,开阔了认识世界的视野。日本有很多地方值得我们学习,特别是经济发展中环境保护方面的经验、发展高科技的具体措施、规范的管理和敬业精神、重视教育和文化素质的提高等多方面,都具有启示和借鉴的作用。我衷心地祝愿这种中日两国、两校之间的交流继续深入下去,我愿为深圳大学与熊本学园大学之间的两校交流和中日两国人民之间的友好交往做出努力,愿中日两国人民永远和平相处,世代友好下去!

最后,借此机会对贵校,特别是国际交流中心的老师给予我的关心、支持和帮助表示衷心的感谢!

とうとう桜の季節の到来を待たずに、私は交換教員の生活を終え、日本を離れることになりました。今、熊本学園大学で過ごした半年のことを振り返って、とても懐かしく思います。熊本にいる間、大学側からの親切、丁寧なご対応のお陰で、多くのイベントに参加でき、多くの友人をつくることができました。先生方や多くの友人の皆さんからいただいたご親切とご支援、一生も忘れることはできません。半年の生活を振り返って、短い間でしたが、多くのことを学び、とても印象深い半年でした。

最初熊本の街を見たとき、深圳に比べると、たしかに近代的な雰囲気には欠けるような街に見えました。しかし、どことなく落ち着いていて、のんびりとした熊本の街で、私はあこがれの田園的な生活を過ごすことができました。ここは新しい空気と美しい環境があり、街がきれいで、交通も便利です。人々の生活は質が高く、優れた条件に恵まれている。生活するのにとっても良い街だと思いました。

熊本では行く先々で、人々は温和で、礼儀正しく、友好的で親切でした。社会全体が平和で和やか、秩序に満ち、調和がとれていた。役所も企業も、管理が行き届いて整然としていました。人々は仕事熱心でまじめでした。サービスがよく、誰もが仕事に対して高度な責任感を持っていることがわかります。特に外遊で東京、大阪、京都、神戸、奈良を訪れたとき、これらの街の高度に発達した交通システム、便利な施設、近代的な管理システムには、いずれも深い印象を残しました。温泉、畳、刺身、相撲、和服、茶道など、伝統的な日本文化の体験も、私にとっては美しい印象と新鮮感を覚えました。

熊本学園大学での半年、大学からきわめて良い研究と教育の条件を提供していただいきました。授業の合間をぬって、私は図書館の豊富な資料に没頭したり、研究室で日本語を勉強したり、あるいはInternetを利用して外部の世界を覗いたりすることができた。情報技術が高度に発達している今の時代、いかにこれらの近代的な技術と施設を生かして、社会の進歩と国民生活の向上を図るか、我々はさらに多くの注意を払うべきものと思いました。現在の日本社会の情報化のレベルは世界範囲で見てもきわめて高いものではないかと思いました。

国際交流を通じて日本の文化に触れることができ、日本という国、日本国民に対する理解を深めることができました。多くのことを考え、より一層視野を広げることができました。私たちにとって、日本には多くの学ぶべきことがある。そのなかで特に経済発展とともに環境を守る経験は私たちにとって多いに学ぶべきところです。中日両国およびわが両大学の交流が今後とも一層進められることを心から願っています。私自身も両大学、両国の友好親善には今後とも大いに努力したいと思います。中日両国が永遠に平和で仲良く付き合っていくことを願います。

最後に、この場を借りて、いろいろとごご支援いただいた多くの友人の皆さん、特に国際交流センターの皆さんに心から感謝したいと思います。

2000年４月２日

（1999年９月から半年間交換教員として受入れ）

教員交流

十月の午後のコンニチワ

大田大学校　金 俊 浩

学生たちは私に一言もかけなかった。講義中には１回の質問もしなかったし、教室の外ではあいさつの言葉もかけなかった。おかしいな、なぜ自分の先生を知らないふりをするのか。私は彼らの沈黙が私と私の講義に対する無関心の表現だと思った。ひょっとすると、それは私の講義の内容や方法が面白くないせいかも知らないと気がした。韓国語は私の専門ではなくて、その講義も初めであったからだ。

それで、第１学期の末に学生たちに私の講義に対する要求事項を書いてもらうことにした。きびしい批判を受けるかも知れないと心配しながらも、一方には今度も大勢の学生たちが沈黙する可能性が高いと思っていた。だが、案外にも多い学生たちがいろんなことを書いてくれた。全部49項目に達した要求の中にはあまり怒らないで下さい、というのもあった。韓国式いや私の式で怒ったことは１回だけだったのに。

ところで、一番多い学生たちが次のように書いておいた。熊本の夏はとても暑いので体に気をつけて下さい。それは不意の要求だった。それは確かにはずれた答えだったし、ただのあいさつに過ぎなかったかも知れない。けど、私はまるで彼らの心の言葉を聞いたような感じだった。感激派の私の一瞬に胸が熱くなった。熊本の夏はほんまに暑かったが、私は学生たちの要求に応じるように健康で楽しく過ごした。

学生たちの口が相変わらず重かった第２学期の10月のある日の午後、構内書店に向っていた私は私の授業に参加していた一人の学生に会った。彼も私を知らないふりをするだろう、と思って私は彼に迷惑をかけないようにうつむいて歩いた。その時、授業中にはいつも眠っていた彼が突然、先生コンニチワといった。それは学生から飛んできた初めでのあいさつの言葉だった。勿論、私は感激した。そして、彼がぜひとも韓国語の単位を取られることを祈った。その後、私にあいさつをかけてきた学生たちがどんどんと多くなった。

もう一年が過ぎた。四十代の時間は日本でも早く去っていった。でも私が日本で見て経験したことは曇りの日のツバキの花のように鮮明に記憶の中に残っていた。なによりも私は学生たちを忘れられない。私よりも恥ずかしがりやであった彼らを、彼らの温かった要求と10月の午後のコンニチワを私は決して忘れられないはずだ。みなさん、ありがとうございました。さようなら。

（1999年３月から１年間交換教員として受入れ）

モンタナ滞在記
――― 交換教員制度の行方

外国語学部 教授　林 日出男

春のモンタナは、タンポポの海（キャンパス内住宅前にて）

1998年夏からの１年間、モンタナ州立大学で交換教員として、主に日本語を教える仕事をしてきた。モンタナで過ごしたこの１年は私個人にしては、大いに有意義なものであったが、この滞在中、この交換プログラムの意義および目的については、大いに理解に苦しんだ。日本語を学ばせる事を真剣に意図したものであれば、日本語教育を専門としない交換教員にできる仕事ではない。このプログラムがそれを認めた上で成り立っている事を考えれば、MSU側はこの日本語授業で、本格的な日本語の指導を期待しているのでない。だとすれば、学生が日本語を覚えてくれないことに頭を悩ます必要も無いわけである。秋学期と春学期を終わって到達した日本語レベルがどのようなものであっても、それは大きな意味を持たない。授業の目的はどこか別の所にあると考えて良いのである。極端に解釈するなら、この授業は「国際交流」の一環であり、日本という国に少しでも多くの学生が関心を持ち、そのような興味を育て、好日的感情が促進されれば、この授業は成功であるとも言える。厳格な授業運用で脱落者を平然と切り捨てるタイプの指導法は、当然適切ではない。指導者が素人である限りそうする資格もない。学生に過度のプレッシャーを与えず、脱落者を一切出さない考え方の授業こそが求められているのである。予習復習をしていなくても、安心して楽しく出席できる授業が理想である。しかし、それで良いのか。「JapaneseⅠ，Ⅱ」という名を与えられながら、日本語力養成という目的意識が希薄な授業をしてよいのか。結局この両極端の狭間で、教師の心は揺れ動く。

元来、この交換は、熊本県とモンタナ州の四大学交流が始まった頃、学生レベルに留まらず、教員の交換もできないかという、大胆な発想で始まった。大学の国際交流がまだ物珍しい時代であり、出来上がった一つのパイプを可能な限り太くすることに主眼が置かれた、ナイーヴな交流が始まった。当初、求められるままに、日本語授業に加えて専門の授業を英語でされた熱心な先生もおられ、軌道に乗ったかに思えた。しかし、それが過剰負担であったこと、MSU側からの交換教員には専門の授業をする義務がなかったことなどで、日本語の担当のみの体制が出来上がった。日本語を教える教育を受けていない教員が、米国の大学で日本語を教え、英語を教える教育を受けていない教員が、日本の大学で英語を教える、という現状はどこか矛盾に満ちている。もちろん、この制度を利用した私にこれを批判する資格があるとは思わない。日本語教育の素地のない私が、このような貴重な機会を得られたのは、正にこの制度があったからである。しかし同時に、私がここで日本語を教えて良いのかという疑念は、滞在中消えなかった。また、日本語を教えることが不慣れな仕事とは言え、時間的な余裕は十分過ぎるくらいに確保できる。少なくともこの派遣は、学園大学に残した同胞の大いなる犠牲の上に成り立っている。それに答えるだけの成果が得られるものでなければならない。資格のない私が日本語を教える事のみで、それが満たされるとは考えがたい。周りを見れば、米国の他の大学と同じように、MSUでも早朝から深夜まで授業の予習復習に没頭する学生の姿がある。その中には日本からの留学生も含まれる。教える側の教員も、授業評価と任期制のプレッシャーの中で研究室に籠もる日々を過ごす。ふと、このキャンパスで、自分がこれだけの自由を享受している事に、罪の意識を持たずには居られなかった。

MSUで専任の日本語教員を採用し、日本語コースが充実しつつある今、本学との交換教員制度は、一つの分岐点にさしかかっている。学園大学から無報酬で来る日本人教員に頼った日本語授業から、専任により日本語授業が自給可能になった意味は大きい。ちょうど、交換教員の待遇を巡って両大学間の不一致が問題化していた時期でもあり、MSUにとっては正しい選択であると言える。一方、学園大学にしてみても、MSUからの交換教員に報酬を払うという不均衡状態は、好ましいものではなく、この制度の終結を暗示させるこの新しい方向は歓迎すべきものである。これにより、相互の関係が途切れるわけではない。むしろ、MSUで日本語を学び、本学に留学を志す学生は増える可能性がある。MSUと教員を交換しているという謳い文句は失うが、学生の交流がこれだけ活発化した今、それはむしろ不要な負担と考えるのが妥当である。交換教員制度が実質的な意味を持つ時代が過ぎ去ろうとしているのは、その意味で、両大学がそれを越える国際交流活動を展開するようになった事を意味する。今後の両大学の交流が更に実り大きものとなることを望みたい。

（1999年８月から１年間交換教員としてモンタナ州立大学に派遣）

教員交流

ひとつの旅
～振り返りの時間～

商学部　教授　貞松　茂

（筆者は後列中央）

大田大学校での日本語教育を無事終えた。日本語は英語に次いで人気があるそうだ。日語日文学科には1999年度から昼間生もいることになり、昼・夜間の２年生に日本語会話Ｉや日語作文、夜間の３年生に日本経済などを教えた。２年生は実際上、このときからが日本語の専攻となるためほとんど分からない学生もいて、日本語教授として初めての私はかなり難儀した。やはり発音である。とくに、「ざ・ず・ぜ・ぞ」と「つ」である。これらはハングル音にはないものである。例えば、「どうぞ」が「どうじょ」と発音される。舌の使い方を四苦八苦しながら説明し、練習させた。それなりの効果はあったようである。随分上手になった学生もいた。使い慣れている日本語であるが、授業は日本語感覚に潜む日本人のこころのあり様を顧みるよい機会となった。

大学校では学生主催の行事が多い。学生は学科中心で動く。各学年、昼夜間別に代表・副代表がいて、さらに学科全体に会長がいる。行事のなかでMT（Membership　Training）というものがあって、これは先生と学生間や学生相互間のコミュニケーションを目的として行なわれている。１泊２日のバス旅行である。私も２回ほど参加した。最初のときは全学年、昼夜間生一緒であった。見学や登山、話し合い、レクレーションなどを行い、最後は飲んで終わる。食料はすべて持ち込み、自分たちで作る。共同作業の手際もよく、料理はうまかった。学生からの働きかけに彼らとの素朴なふれあいを感じた。

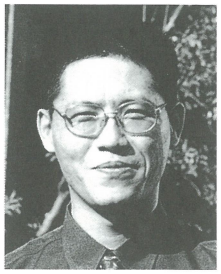
学科の先生や３年の学生たちと一緒に、‘ハンマウム’という障害者施設を訪問した。ボランティア活動としてときどき実施されるらしい。これも学生が企画するのだそうだ。こどもたちと遊んだり、彼らの運動靴を洗ったり、さらには後で何かを植えるのであろう、畑を耕したりなどの奉仕活動をした。こどもたちの姿はいろいろである。いつも甲高い声で口ずさむ子。短く、同じメロディーであるがとても上手い。ニコニコしながら踊る子もいた。手をたたくと小躍りしながら一層嬉々たる笑みを浮かべる。彼らによけいな執着心はなく、とても純粋に無垢として自分を生きている。彼らはとても眩しく見えた。

大田での時間は、日頃見過ごしているものや落し物を見つけに行った旅でもあった。それから今ひとつ、本学からの留学生は先生や学生たちにとても親われ、評判が大変よかった。特記しておきたい。

滞在中、総長をはじめとして大学校の教職員の方々には大変お世話になった。私が、無事、終えることができたのも皆様のお陰である。厚くお礼を申し上げたい。

（1999年２月から１年間交換教員として大田大学校に派遣）

交/換/教/員/往/来/



杨　光　辉 先生
（ヤン　グワァン　ホイ
中国・深圳大学）
1999年９月から半年間、交換教員として中国語を担当。

花谷　　薫 先生
（経済学部教授）
2000年１月から半年間、交換教員として米国・モンタナ州立大学へ派遣。

李　義　澤 先生
（イ　ウィ　テック
韓国・大田大学校）
2000年３月から１年間、交換教員として韓国語を担当。

'99/研/修/団/往/来/

研修団名（受入れ）	研修期間	団員数
甲南大学留学生研修団	４月16日～19日	33名
大田大学校学生研修団	６月24日～７月16日	23名

研修団名（派遣）	研修期間	団員数
学生研修団中国・ヴィエトナムコース	３月６日～13日	９名
学生研修団タイコース	３月７日～14日	16名
経済学部外国事情研修米国コース	７月５日～８月４日	94名
経済学部外国事情研修中国コース	７月９日～８月５日	49名
経済学部外国事情研修韓国コース	７月12日～８月６日	11名
外国語学部海外研修米国コース	７月８日～８月８日	39名
外国語学部海外研修英国コース	７月８日～８月８日	28名
外国語学部海外研修中国コース	７月10日～８月10日	23名
外国語学部海外研修韓国コース	６月27日～８月３日	25名

留学体験記

ニュージーランド留学

商学部　経営学科　小川 美智子

昨年の２月から12月末までの約11ケ月間、私はニュージーランドのオークランド市に留学しました。本学からのニュージーランドへの留学生は私が初めてだったので、少しとまどいながらの留学となりましたが、今あの11ケ月間を思い返してみると、とても充実できた日々であったように思います。

私が10ケ月間通った学校、ユニテック・インスティテュート・テクノロジーはオークランドの中心街から車で約20分ほどの所にあり、小高い丘の上で、緑豊かな広大な敷地の中に建っています。その学校の１学科であるEnglishコースに私は所属し、英語の文法から会話・プレゼンテーション・研究レポート・デイベートなど、英語力を向上させるための徹底したプログラムに参加しました。英語を苦手としていた私にとって、この英語コースで最終的にディプロマという卒業証書を獲得できたことは、私の中で１つの大きな自信となりました。

また、もう１つ自信を持つきっかけとなったのが、帰国前の１ケ月間、１人でニュージーランドの南島を旅行したことでした。１人旅行とは言っても、宿泊先や移動中には様々な国から旅行に来ている人達がたくさんいて、英会話の勉強にもなるし、色んな国の話しなどができて、とても楽しい旅行となりました。英語を堪能に話すドイツ人の大学生や、毎年その土地に旅行に来るという日本語でギャグを言うニュージーランドのおじさん、日本人のお母さんを持っているのに日本語が話せないロンドンに住むお姉さんなど、色々な人と出会いました。私の会話力がこの旅行でどれだけランクアップされたのか分からないくらい、旅行後の私の英会話は上達していたのです。

そして私が最も自信を持つきっかけとなったのが、この旅行中に体験したスカイ・ダイビングでした。場所はワナカという街で、スカイ・ダイビングには１番適した場所といわれている所でした。タンデム・ダイビングという、インストラクターが後ろに付いてくれるものだったので、少しは安心して飛ぶことができたのですが、広い飛行場からチャーター機で一気に上空3.3kmまで飛び、合図と共に地上まで真っさかさまに落ちていくという、とてもスリルのあるものでした。しかしパラシュートが開いた後の雄大な景色は、何物にも代え難いほどの素晴らしいものだったのです。こうして私のニュージーランド留学は終り、多くの事を学ぶことが出来たわけですが、それらが今の私の大きな自信に繋がっていることが１番良かった点ではないかと改めて思います。

（1999年２月～12月　派遣留学生としてニュージーランド・UNITECに派遣）

（左が筆者）

留学生活を振り返って

経済学部　国際経済学科　上田美和

初めてロンドンのヒースロー空港に降り立ったときはその寒さに驚きました。9月はじめの残暑の厳しい熊本からは想像もつきませんでした。

そんなふうにイギリスに着いて、最初の何カ月かは驚きの連続でした。雨が降っても傘をささないイギリス人やフィッシュ＆チップスという名物料理のフィッシュの大きさにいちいちびっくりしながらもだんだんと「こういうものなのだ」と思えるようになってきました。

意外と大変だったのが、学校の授業でした。基本的に各国からの留学生と一緒に勉強しました。ヨーロッパ各国からの学生の積極性と堂々とした態度は新鮮でした。いちばん印象に残っているのはプレゼンテーションスキルという授業です。その授業では毎週のように学生の誰かがプレゼンテーションをしました。わたしは日本の文化やイメージについて紹介しました。ただ、人前で話すのが苦手なので、わけが解らなくならないよう、発表の度、何度も練習をして挑みました。そのため、終わったときには達成感というか充実感がありました。

慣れないところは自分に余裕がなく、なかなか積極的になれず、落ち込むことも多かったです。相手に思っていることをうまく伝えられずもどかしい思いをしたこともありました。そんな中で留学を通していちばん貴重に感じたことが人との交流でした。見知らぬ土地に居て初めていかに周囲の人に助けてもらって生きているかに気付きました。ちょっとしたことで、声をかけてもらったりするとうれしく、「ありがたいな」と思う瞬間が何回もありました。

また、学生たちと話すことはわたしにとってとても刺激的でした。なぜならその話題がとても幅広いものだったからです。宗教、戦争、政治、経済、文化など、それまでは話題にもしなかったようなことが話題だったからです。

しかも、みんなそれぞれに自分の意見をしっかりと持っていて、自分の意見を言う以前にあまりにも無知な自分が情けなくなりました。自分の意見をはっきり主張できることがいかに大切かを身にしみて感じました。

でも、そんな経験のおかげで興味の幅が広がったし、今でもその時知り合った友人の出身国のニュースには自然と注意が向きます。

わたしは留学を経験して少し強くなりました。行く前はあれこれと心配をしていたのですが、結果的に9カ月間がんばってこられたことはおおきな成果です。

留学中に感じたこと、気付いたことはこれからのわたしの糧になっていくことでしょう。

（1998年9月～1999年6月　派遣留学生として英国・リバプール　ジョンモーズ大学に派遣）

（下段左端が筆者）

留学体験記

一人じゃなかったモンタナ生活

外国語学部　英米学科　櫻井淳也

正直に言ってモンタナにいた10ケ月間、辛いとか、悲しいとか、日本に帰りたいなどと思ったことは一度もありませんでした。むしろその十ケ月は僕にとって、新鮮でそして限りなく快適で毎日がとても充実していました。だからといって別にただ遊んで暮らしていたという意味ではなく、特に最初の学期、秋学期は夜の12時まで図書館で勉強をするのは当たり前でしたし（寮に帰ってからも勉強しないといけない日もありました。）、時として土、日曜日ですら授業毎に課される課題や、宿題のために費やすこともありました。もちろん授業に出ても始めのうちは先生の言っていることが全く理解できず、講義の内容をノートにとることすら出来ませんでした。そしてその結果ほとんどのクラスで最初のクイズやテストで最低点を取ってしまい非常に悔しい想いをしました。

しかしながらこのようなストレスの連続する生活だったにもかかわらず、あのように快適に過ごせた大きな理由として、やはり友人をはじめとするたくさんの人達の助けがあったからこそだと思います。

それぞれの授業中それぞれの先生が僕のところに来て、「調子はどう？」とか「分からない事はない？」などと頻繁に声をかけてくれて、クラスで一人だけだった留学生である僕にいつも気を使ってくれました。中でも非常に印象深かったのは、秋学期、昆虫学の授業をとったときで、そのクラスの最初のクイズで勉強したにもかかわらずクラス最低点を取った時です。先生は落ち込む僕を見て、「私はあなたがちゃんとできるって知ってるわ、ただ英語だからみんなより少し時間がかかるだけなのよね。」といって励ましてくれました。またその後、同じクラスで今度はクラス最高点を取ったときには、そのテストのあとすぐに僕のところに駆け寄ってきて「すごいじゃない！」と声を掛けてくれました。先生はきっと気づいてないと思いますが、その時のその一言がこれからモンタナで生活していくこの僕に、どれほど勇気と自信を与えてくれたことか・・　あの一言は今でも忘れることはできません。

友人面でも非常に恵まれていました。冬休み一ケ月ほど寮を出て行かなくてはならない期間があったのですが行くところも無く困っているという話を写真のクラスの友達にしたところ、だったら家においでよとポートランドの実家に招待してくれ、またサンクスギヴィングやクリスマスではホストファミリーがアメリカの休日をぜひ経験しておきなさいと言って、３、４日ほど家においてくれました。

振り返れば、本当にたくさんの人に支えられた、そして数え切れないほどの愛情に包まれた10ケ月だったと思います。僕にとってボーズマンを離れるのはあまり辛いことではありませんでしたが、あの町で出会った人たちとの別れは何よりも悲しく、寂しいものでした。別れ際に友達と交わした「またいつかどこかで会おうね。」という言葉がまだ、消えることなく頭のなかに残っています。

（1999年８月～2000年５月　派遣留学生として米国・モンタナ州立大学に派遣）

（左端から３人目が筆者）

１年半の留学生活を通して

経済学部　国際経済学科　田上瑠美

私は1999年２月から７月までの半年間、経済学部に設けられていた認定私費留学制度を利用し北京語言文化大学に留学、続けて１年間中国人民大学で大学の派遣交換留学生として過ごしました。

私が１年半に及ぶ長期留学を決意したきっかけとなったのは、大学２年次に参加した経済学部の外国事情研修プログラムです。それまで１年次の春休みにゼミ旅行で一度中国に行ったことがあり、中国に興味を持ち始めていたのですが、１ヶ月の短期研修で前回を上回る程の数々のカルチャーショックを受け、これによりかえって私のこの国に対する興味が増したのです。

それで私は帰国後、高度経済成長を維持する中国がどのように様変わりし、発展していくのかを自分の目で見たいと中国の首都である北京を留学先として絞り、留学を決意したのです。

ちょうどその頃、熊本学園大学が新しく北京の大学と交流校の提携を結び、その大学が私の行きたい大学と重なったこと、また私費認定留学制度と交換留学制度の２つの制度を利用することにより１年半の留学が可能であることに魅力を感じ、交換留学の試験を受け、幸いにも願いが叶ったわけです。

こうして念願叶って留学に踏み切ったのですが、留学中は何度も壁にぶつかることがありました。

まず、私が最初に入ったクラスは、日本人は私１人だけで、クラスのレベルが比較的高く、そのレベルについていくのがやっとでした。どうやったら彼らのように語学力を伸ばすことが出来るのか、また彼らとどうやってコミュニケーションをとって良いのか分からなくて、しばしば悩むこともありました。しかし、周囲の友人から励まされ、一生懸命に話すように心掛けたり、授業中も積極的に発言をするようにしていたら、知らず知らずのうちに彼らとコミュニケーションがとれるようになり、様々な国の友達が増えるようになりました。それからというもの、この環境がかえって私にとって良い影響をもたらし、中国語を通して世界各国の友人達とお互いの国の文化、習慣の違いを討論したりして、異文化に対して理解を深めることが出来ました。

留学中の他国の人々との交流を通して私は、言葉の重要性を感じながらも、言葉というのはコミュニケーションを図る手段の一つであって、言葉そのものよりも相手を理解しようという姿勢、思いやる気持ちが国や民族を越えて非常に大事だということを学びました。そして同時に、私を支えてくれたたくさんの友人達の存在のありがたさに気付き、感謝する気持ちをますます強く感じるようになりました。

この他に中国の文化、情勢、人々の生活の様子を知るため、私は積極的に課外活動にも参加しました。例えば、長期休暇を利用し北から南まで様々な土地へ旅行したこと、授業の空き時間に書道を習ったこと、小学校を訪問し１日間の超短期教育実習をしたこと、老人ホーム慰問をしたこと、農村宿泊体験などです。

どれもこれも、なかなか味わえないことなので、非常に思い出深く、こんなに貴重な体験をできたことを本当に嬉しく思います。これらの経験を通して中国の抱える問題や中国の風土、中国人の国民性、地域による生活のスタイルの違いというものをあらゆる角度から見たり、身をもって知ることができたことは私の留学生活にとって大きな収穫だと言えると思います。留学を通して様々な経験を積むことができ、留学して本当に良かったです。

最後になりましたが、私からこれから留学をしようと考えていらっしゃる学生の方へアドバイスを一言。

留学はできるだけ早いうちにやってみた方が良いと思います。なぜなら留学で様々な人と接することにより視野を広げるチャンスにもなるし、また早いうちに日本を外から見てみることで、日本や自分というものを客観的に見れるようになったり、また今まで知らなかった周囲の国の情勢を知ったりする機会となるからです。自分の可能性を広げるチャンスは日本にだけあるとは限らないと思います。

はっきり言って語学を学ぶだけなら日本でも可能です。現地でしかやれないことは何かを自分なりに考え、実際にやってみるのも留学の醍醐味ではないでしょうか。

（1999年９月～2000年８月　派遣留学生として中国人民大学に派遣）

（左端から３人目が筆者）

留学体験記

留学報告書

商学部　商学科　川畑秀貴

「大田での生活ノスタルジー・・・」これが私の現在の心境です。

韓国留学から帰国してからもう半年が経とうとしています。いま留学を振り返ってみると、留学中の一年間は本当にあっという間でした。

私が韓国に留学しようと思ったきっかけは大学時代を通して、柔軟性と視野を広げようと思ったことと、何語でもいいから一ケ国語は外国語を身につけようと思ったことからでした。また大学に入学してから韓国の学生のホームステイを受け入れたことをきっかけとして、韓国語に対して興味を持ち、教科書に載っていない実際に生きている言葉を学ぼうと思い留学を決意しました。

韓国の大田大学校では、寄宿舎の中で韓国の学生300人と一年間共同生活をしました。最初の頃はルームメイトとの小さなけんかや討論の連続の毎日でした。そんな生活の中、私は相手に言い聞かせようとしても絶対無駄であることに気づいて、「まず、自分から相手を理解するんだ！」という態度に変えてその態度で接していくうちに、韓国人の学生達もすこしずつ私の言うことを聞いてくれるようになり、今では一生の友達がたくさんできました。本当に留学に行って人間として一番大切なことを学んだ気がしました。

また、留学期間中は精神の浮き沈みが激しく、人に訳もなくあたったり、楽しいときは本当によく笑い、悲しいときはよく泣きました。友人や親から受け取った手紙がうれしくて感激して、一枚の手紙でこんなにうれしいこととは思いもしませんでした。また、自分の意見が相手に理解してもらえなくて悔しい思いをしたり、本当に自分の中で柔軟性や視野が広がったといま日本に帰ってきて思います。

現在は日本に帰国して、日本で生活していますが、去年一年間の韓国での留学生活が大変意義のあったことだったとは、日本に帰国してから少しずつわかるようになってきました。日本と韓国の小さな違いを見つけて感激したり、「日本」というものを自分の中で強く意識したりするようになったのも韓国へ留学したからだと考えています。

現在、朝鮮半島は統一に向けた新しい動きが始まっています。私が統一前の1999年に一年間韓国で留学生活したことは、私が「学生時代にこれだけはやったぞ！」と言うことができる私の誇りです。私は、これからも日本と韓国をつないでいけるような仕事がしたいと思い努力しています。

最後になりますが、日本に帰国する前に交換留学生３人と、交換教授と共に大田大学校のキャンパスに植えた椿の木がすくすくと育ってくれることを願いつつ、この留学報告を終えようと思います。

（1999年３月～2000年２月　派遣留学生として韓国・大田大学校に派遣）

（左端が筆者）

桂林での留学生活

外国語学部　東アジア学科　永田さやか

「桂林山水甲天下」これは桂林の山水は天下一であるという意味を示す言葉です。私は絵に描いたような美しい景色の地、桂林で留学生活を送りました。中国語を勉強する目的で大学に入学し、中国語を話せるようになることを目標としていたため、いつかは留学したいという思いはありました。しかし、単なる語学留学で留学はしたくないという思いから、熊本市と友好都市である桂林市への留学を決意しました。

私の留学生活は広西師範大学で中国語を勉強することから始まりました。日本で中国語を勉強してきたにもかかわらず、自分自身の語学力の乏しさを目の当りにし、情けない思いで一杯でした。その上、桂林訛りの普通話は、日本の大学で習ったものとは異なり、慣れるのにかなり時間がかかりました。桂林の言葉を耳にするのは初めてであったため、最初はとても大変でした。大学の授業以外には、中国人の大学生に日本語を教え、私は中国語を習うという相互学習をして、中国人の大学生との交流も深めました。桂林で留学生活を始め約２ヵ月経った頃、桂林市と熊本市の友好都市締結20周年の関連行事がありました。私は熊本市の留学生として参加しました。文化交流の準備を手伝ったり、通訳をしたりと、今まで全く経験のないことでした。友好交流事業に参加できたことは、非常に希な経験であり、しかも20周年という記念すべき年に留学できたことは大変光栄でした。

さらに、大学の休みを利用して、旅行に出掛けました。広西壮族自治区内の他の都市をはじめ、上海、西安、北京、成都に行きました。旅行は自分自身の語学力を試すとても良い機会となりました。旅行に出掛けいろんな人と話し、いろんな所を観光してまわり、様々な中国を見たような気がします。広い中国の中で行くことができたのは、ほんのわずかな所に過ぎませんが、旅行できただけでとても満足でした。特に北京に行った時は、２年前の海外研修を思い出し、とても懐かしく感じました。あの時工事中だった王府井が見違えるようにきれいになっており、中国の発展の速さを身にしみて感じました。表通りは高層ビルが並び、少し裏に入れば昔ながらの町並みが残っているという風景も、あと何年かすれば高層ビルばかりになってしまうのだろうと思うと、少し寂しい気がしました。

11ヵ月間の留学生活を通して、様々なことがありましたが、留学することができ本当に良かったと思っています。途中で食べ物が合わずに病気をしたり、苦しい時期もありましたが、何とか乗り越えて、無事に留学を終えることができました。留学して約２ヵ月ぐらいは、話すのに大変苦労しました。原因の一つは語学力が乏しかったことですが、やはり自分の知識が乏しいということも大きな原因であったと思います。中国に行って初めて、日本について何も知らないと気付きました。日本人として日本に関して意見を求められることが多く、曖昧にしか言えない自分をもどかしく感じました。留学するまで、自分の意見を人前で発表することはほとんどなく、考えてもみなかったのですが、留学して改めてゆっくりと考える時間があり、自分自身や日本、中国、そして世界について見つめ直すことができました。他の国から来ている留学生はしっかりとした考え方をもっており、同じ大学生として恥ずかしく思いました。

無事留学を終えて、これから先は中国での生活を無駄にしないように、中国語の勉強は続けていきたいと思います。それと同時に日本、アジア、世界についても学んでいく必要があると思います。中国語のレベルがあがり、何不自由なく話せるようになったら、様々な人々と中国語を使って、本音を語り合いたい。それが私の今の目標です。

（1999年９月～2000年７月　熊本市派遣留学生として派遣）

（中央が筆者）

留学体験記

経験という宝 ～一年間の中国留学を経て～

経済学部　国際経済学科　大田黒 洋介

私が今回の長期中国留学を決意したのは２年前、経済学部の「中国事情研修」に参加したことがきっかけです。３週間という限られた時間の中でしたが、そのとき目にした全てのものが、当初想像していたそれより遥かにダイナミックであったというのが私のこの国に対する最初の印象でした。そのころから私の中で自然と湧き出てきた「もっとこの国を知ってみたい」という好奇心が私の気持ちを駆り立て、長期の留学生活に踏み切らせたのだと思います。

私自身、出来るだけ「標準語」に近い中国語を習得したかったとの理由から、首都・北京の大学で中国語を学ぶことを選択しました。国同士で比較した場合、GDP などの経済指標の値が、日本のそれを下回っているとはいえ、そこはやはり一国の首都。日常生活を営むにあたっての不自由さは全くといっていいほど感じませんでした。そのような状況の中、北京から動かずしてこの国の本質に迫るということを難しいと感じた私は、長期休暇等を使って出来る限り北京を離れ、「生」の中国を見ることを心がけました。

無理もありませんが、日本人、特に我々の世代は生まれたときから、物のあふれたこの豊かな環境をごく当たり前のものだと思い込み生活しています。しかし一度北京を離れると、中国の内陸部と沿岸部の都市との膨大な経済格差をはじめ、貧しい中国の生活を浮き彫りにするようないくつかの光景を目の当たりにし、例に漏れずこの日本の豊かさを当然のものと捉えていた私にとって、その旅は非常に考え深いものとなりました。そのなかでも強く印象に残っているエピソードを一つご紹介したいと思います。

夏期休暇を使って、知人と観光地である中国古代の王の墓を見学しに行ったときのことです。入場料を払い、ゲートをくぐるや否や小学校低学年ほどの少年、少女４～５人が私たちを取り囲み、口々に「給我錢。」（中国語で金をくれの意）と叫びながら、我々の服を半ば強引に引っ張るのです。彼らの着ている衣服や、泥で汚れた体を見るに、観光客ではないことは容易に想像がついたのですが、それでも何か様子がおかしいと思った私は、ふと両側にそびえ立つ小高い丘の上に目をやりました。すると、明らかに彼らの親だと分かる数人の大人が子供達に向かって何かしらの合図を送っていました。そうです、彼らは自分の子供達を使って外国人観光客相手にお金をたからせているのです。私は、そうした行為自体に強い怒りを覚えはしましたが、もう一方で、そうでもしないことには今日の暮らしもままならないという、「老百姓」（中国語で一般意味の意）の届かぬ声のようなものが聞こえたような気がして、複雑な気持ちになったのを今でも覚えています。

上にご紹介したものはごく一部の例にすぎませんが、このような決して表面的ではない中国の本質を自分自身で体験できたこと自体、大きな財産になったと思いますし、今後この国となんらかの関わりを持ち続けるつもりである私にとって、この留学で得たあらゆる経験が今後の人生に大きくプラスに作用するものと確信しています。

また、留学で得た学習面での最大の成果と言えば、中国政府認定の中国語検定試験（HSK）の８級を帰国と同時に取得できたことです。成績を知らされた時は言葉にできないくらい嬉しかったし、なによりも自分の努力が報われたことに対して大きな達成感を感じました。これは、今後の私の中国語学習にとって、大きな弾みになるものだと思います。

最後になりましたが、今この国際交流レターを読んで下さっている学生のみなさんへ一言。大学時代とは人生の中で、自分の時間を自分の夢実現のために充てるのに最も相応しい時だと私は考えます。特にこの大学は国際交流センターを中心として、海外に目を向けて何かをやり遂げようとする学生をサポートする体制が整っています。後輩の皆さんの中で一人でも多くの方が海外に興味を持ち、世界各国へ羽ばたいていかれることを心から願っています。

（平成11年度１年間私費留学生として中国へ留学）

（下段が筆者）

学生研修団

タイの生活記

社会福祉学部　社会福祉学科　馬場由美子

この研修旅行における一番のメリットは、現地の人々とじかに触れ合うことができることであると思う。私は、カセサート大学に通うメッタと、パーン、マーン（タイでは父親のことをパーン、母親のことをマーンと呼ぶ）の３人家族の家にホームステイをした。しかし、メッタと同じ大学に通うケイも、私がいる間メッタの家に泊まりともに時を過ごした。

空港につくなりホストファミリーと過ごすことになっており、最初は少し緊張した。それというのも、風邪気味だったせいか、飛行機内の乾燥がのどに影響し、声がかれてしまいうまくコミュニケーションをとることができなかったからだ。その点、メッタやケイが日本語を話せるということは、私にとっても救いであった。しかし単語単語をはっきりと正確に伝えることは、とても大切で、一日目は声が出ないこと、そして相手にうまく伝えられないことなど、心身的に疲労も大きかった。水に注意するようにいわれていたため、なかなか喉を潤すこともできず、食欲も低下していたため、一日目の夜はみんなで食事に出掛けたのだが、あまり食べることができなかった。その様子を見て、パーンやマーンも心配してくれ、また、タイの料理が口に合わないのではないかと思ったらしく、二日目は日本料理もあるレストランへと連れて行ってくれた。しかし、二日目にはもうすっかり食欲も戻っていたので、たくさんタイの味を味わうことができた。

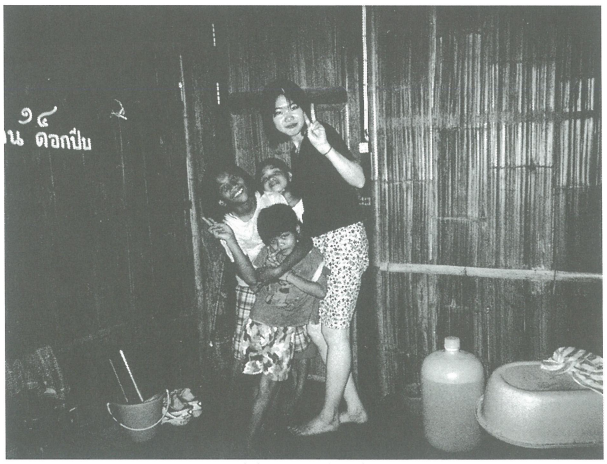
タイでの朝は早く、私たちは６：00に起きたのだが、起きた時にはすでにパーンもマーンも出掛けており、私たちもすぐにご飯を食べにいくというメッタ達に連れられて、町を歩きバスへと乗った。着いた場所は市場のような広場でたくさんの店が路上に並び、多くの人が物を売ったり買ったりしていた。その中の一角にメッタの家の店があり、マーンはそこで働いていた。そのお店は主に雑誌を取り扱っており、店番をメッタが代わり、私たちもその横に座って一緒に店番をしながら食事をとった。本当に生活の中の一ページに溶け込んだようで、不思議な光景であったけれど、とても貴重な体験だった。そこで、店番をしながら日本についての話題にも触れ、タイには日本のものがたくさん入ってきていることを知った。アニメや芸能人について、共通の会話をすることができ、とても楽しかった。

その後メッタの大学の友達と合流し、20人近い人数で市内を案内してくれた。一人一人がとても温かく、たくさんの人と触れ合うことができ、また、日本語についてみんなで討論したこともとても印象深かった。微妙な日本語の表現の違いについて私たち日本人とタイの学生らで話をしたのだけれど、私たちも上手く説明できず、改めて日本語の難しさを日本人ではあるもののという思いを痛感してしまった。このように、一つ一つの出来事がそれぞれ私にとって大切な思い出である。タイの国に友達ができたことで、新しい交流が生まれたこともこの旅の大きな収穫であった。ただ、もう少しタイの国について学んでおけばもっと多くの事を語り合えたかもしれないと後悔した場面もあった。

ホストファミリーと別れた後、訪れた子どもの村でも短いながらも楽しい時を過ごせた。そこで覚えた言葉は「チュアライ？」である。「名前は？」という意味で、初めて顔を合わせる子どもとの合言葉のようによく用いていた。

この７泊８日で過ごした出来事は、とても全部書ききれないが、一つ一つの事が鮮明に残っており、その中でもやはり、ホームステイや子どもの村のように、じかにその土地の人々と触れ合ったことが、私の中で一番の思い出である。普通の旅行では味わうことのできない体験をたくさん積むことができ、タイの人々の温かさに触れた旅であった。

（2000年３月学生研修団員としてタイを訪問）



（右端が筆者）

FOREIGN STUDENT EXCHANGE SNAP SHOT

新入生歓迎ピクニック

バスで出発。楽しそうです。

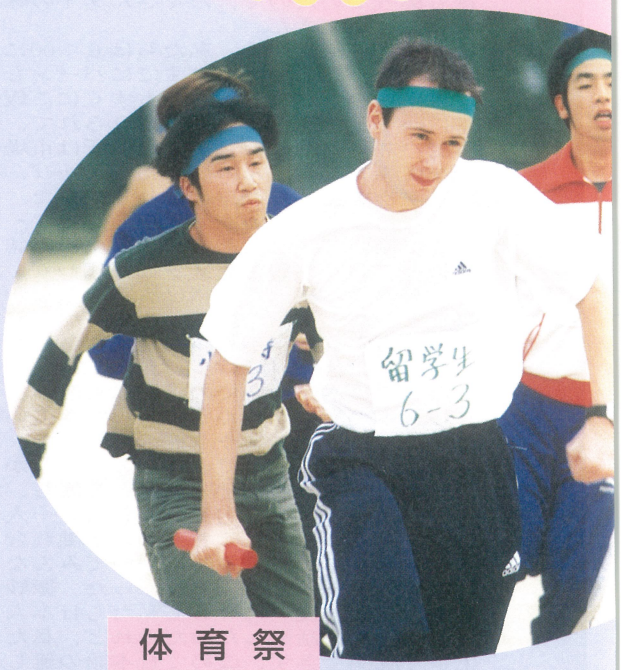
新入居者歓迎パーティー

国際交流会館に入居した留学生と日本人学生のパーティーです。

留学生交

お茶の練習

慣れない正座ですが、初めてお茶を点てました。



体育祭

留学生チーム、リレーで上位を争います。

託麻祭

今年も留学生の模擬店、ぎょうざは好評でした。

クリスマス会

敬愛幼稚園で留学生がサンタになって、
プレゼントをもってきてくれました。

流スナップ

交流会

中学生から習字を筆の使い方から習いました。

卒業式

卒業式を終えた留学生が国際交流センターに挨拶に
来てくれました。

EVENTS 1999年　国際交流 EVENTS

1999

	交換教員関係	交換留学生（派遣）	交換留学生（受入れ）
1月			
2月	大田大学校　秦錫用先生帰国 貞松茂先生出発（大田大学校）	大田大学校から帰国 深圳大学から帰国 深圳大学へ出発 UNITEC へ出発	大田大学校へ帰国
3月	大田大学校　金俊浩先生来学	大田大学校へ出発	大田大学校から来熊 リバプール・ジョンモーズ大学から来熊 深圳大学へ帰国
4月	深圳大学　刘荣荣先生来学		深圳大学から来熊
5月		モンタナ州立大学から帰国 キャロル大学から帰国 モンタナ大学から帰国	
6月		インカーネットワード大学から帰国 アワーレディオブザレイク大学から帰国 リバプールジョンモーズ大学から帰国	
7月		アルスター大学へ出発	モンタナ州立大学へ帰国 リバプールジョンモーズ大学へ帰国 アワーレディオブザレイク大学へ帰国 インカーネットワード大学へ帰国 キャロル大学へ帰国
8月	林日出男先生帰国（モンタナ州立大学） モンタナ州立大学 ランダル　バッチェラー先生帰国	モンタナ州立大学へ出発 キャロル大学へ出発 モンタナ大学へ出発 インカーネットワード大学へ出発	
9月	深圳大学　刘荣荣先生帰国 深圳大学　杨光辉先生来学	リバプールジョンモーズ大学へ出発 中国人民大学へ出発 広西師範大学へ出発	モンタナ州立大学から来熊 リバプールジョンモーズ大学から来熊 インカーネットワード大学から来熊 キャロル大学から来熊 UNITEC から来熊 アルスター大学から来熊
10月			
11月			
12月		UNITEC から帰国	

INTERNATIONAL EXCHANGE EVENTS

短期派遣・研修団	そ の 他	
		1月
リバプール・ジョンモーズ大学 短期派遣留学生出発		2月
学生研修団東南アジアコース派遣 リバプール・ジョンモーズ大学 短期派遣留学生帰国	日韓文化交流基金学生派遣 深圳大学梁桂麟副学長一行来学	3月
甲南大学留学生研修団来学	タイ・チュラロンコン大学　キティ　リムコンスル氏来学 インカーネットワード大学　ルイス・アグニースィ学長来学	4月
	北古賀理事長・ルウィン委員長大田大学校訪問 北京第二外語学院常殿元学長一行来学	5月
大田大学校学生研修団来学		6月
大田大学校学生研修団帰国	経済学部外国事情研修米国・中国・韓国コース出発 外国語学部海外研修英国・米国・中国・韓国コース出発 カナダ　セント・メアリーズ大学国際交流ディレクター来学	7月
	経済学部外国事情研修米国・中国・韓国コース帰国 外国語学部海外研修英国・米国・中国・韓国コース帰国 角松学長一行訪米	8月
		9月
	キャロル大学プログラムディレクター来学	10月
	中国　広西師範大学副学長一行来学 外国人留学生弁論大会 日韓文化交流基金学生派遣 留学生とのスポーツ交流会（学生議会）	11月
	中国　社会科学院副院長来学 中国　外国語大学外事処長来学	12月

学生研修団

ベトナム探検隊

商学部　商学科　平川 智英

私がこの研修に参加しようと思ったきっかけは就職活動でした。３年生も終わりに近づき、いざ就職へ向けて大学生活を振り返ってみると、意外と何もしてないことに気がつきました。学生の間にできること、そして履歴書にも書けそうなことを考えている時に、丁度この研修を知り参加を決めました。

そしていよいよベトナムに出発し、まずはハノイを訪れたのですが、そこで大きなショックを受けました。ベトナムにあまり裕福なイメージは抱いていなかったので覚悟はしていたのですが、服装や街並が想像を絶するもので、正直驚きました。するといつの間にか後ろからは物乞いがついてきているし、最初は不安だけが膨らむばかりでした。

翌日、ハノイで日本語を勉強している学生達と交流する機会があり、ここでも多くのことを学びました。

何より驚いたのはその日本語のうまさです。はっきり言って日本人と変わりません。もちろん英語も話せます。６年間英語を勉強してまともに話せない自分を考えると、もう尊敬するやら恥ずかしいやらでした。

交流会の後に寮を見せてもらいましたが、そこでもまた驚きました。コンクリートの打ちっぱなし、と言うよりもコンクリートがむき出しと言った方が正確かもしれません。部屋はというと、ドアを開けると壁際に二段ベッドがいくつかあり、そのベッドの上で勉強もします。個人の部屋なんてありません。仕切りすらありません。「こんな所でよく勉強できるな。」というのが正直な感想でした。それでも彼らは必死で勉強して、頑張っていました。私は日本がどれだけ恵まれているのかということに今さら気付きました。そしてそんな環境の中で甘えきっている自分がとても恥ずかしくなりました。

その後首都であるホーチミンにも行ったのですが、とてもハノイと同じ国にある都市とは思えないほど都会でした。見るからに高そうなホテルや舗装された道路。夜になればネオンが街中に溢れていて、欧米人がうろうろしていました（相変わらず物乞いもいましたけど）。

日本に帰って来てベトナムのツアーパンフレットなどを見ると、ほとんどがホーチミンには行くけどハノイには行かない、といった内容のものばかりでした。私はこの研修で多くを学び、たくさん驚いて良い経験をしたと思います。しかしそれはハノイにも行ったからです。ホーチミンだけなら、おいしいものを食べてお土産買って、印象としては「やっぱり貧乏な国やね」くらいで終わっていたと思います。

表面だけでなく、本当のベトナムに少しでも触れることができたこの研修は、私にとってとても有意義なものになりました。

自由に使える時間がこんなにあるのは学生のうちだけだと思います。お金と時間に多少の余裕があるなら、この研修に参加されることをぜひおすすめします。自分の目で現実を知ることはなかなか面白いですよ。

（2000年３月学生研修団員として中国・ベトナムを訪問）

（左端が筆者）

留学生のこえ
FOREIGN STUDENTS' VOICE

ちょっとスピーチです。

モンタナ州立大学　テリース・タッカー

皆さん今日は。私はモンタナ州立大学のテリース・タッカーでございます。日本に来てから10ヶ月たったのにまだ毎日いろいろな新しくて面白い習慣にぶつかります。特に日本語を話す時日本と西洋の考え方の違いを感じます。

私はまだ初心者です。一番初めに来た時日本語と日本の文化については何も分かりませんでした。『アイウエオ』から勉強しました。ただ新しい言葉を習うのは面白くて楽しいと思っていました。最初は「私はnantoka kantokaです」だけ分かりましたがだんだん一つの文の中で分からない言葉が少なくなって分かる言葉がふえて来ました。『何々ってなんと言うんですか』とか「どう言う意味ですか」などをたぶん使いすぎましだそのお陰で最近誰と話しても大体ふつうの会話は分かるようになりました。分かるようになったら面白いところに気がつきました。

例えば『ちょっと』です。日本人は「ちょっと」をよく使うでしょう。『ちょっと待って』とか『ちょっとだけ』とか、この場合は英語といっしょですね［Just a moment］or［only a little］っと言うカンジですがほかの時『ちょっと』の使い方は外国人にとってはもっとふくざつでびみょうな意味があります。例えば『行きたくないとか、食べたくないとか、その人があまり好きじゃないとか』です。しかし「ちょっと」はまたとても便利でふしぎな言葉だと思います。時々「ちょっと」だけでも答えになります。ほかに説明は何もいりません。英語ではそんなに簡単な答え方はざんねんながらありません。

ちょっと例を出したいと思います。例えば私が友達に「あなたは彼の事が好きですか」と聞くと「hmmmmちょっと…」これは「ちょっと大きな世話になっています、答えたくないですよ。」それで「ちょっと＊」これは「ちょっと好きですね。」で「ちょっと!!@#$%」「あんたなんばいいよっとアガンバゲナスバ！」って言うかんじです。

なぜなら「ちょっと」だけでは本当に意味がありません。だけど日本人にとってはっきり言うのはちょっと失礼ので「ちょっと」と言うと聞いている人が言うている人の本当に話したい事をそうぞうしなければなりません。ここは日本人と欧米人の考え方の違う所だと思うます。英語を話す人は聞いている人に分からせる事が一番大切です。相手がわからないときは分かるようにはっきり言わなければなりません。しかし日本人言わなかった部分を聞いた人ががんばってそうぞうしなければなりません。

10ヶ月たった今でも私はここにぶつかります。辞書で「ちょっと」をさがしても日本人の本当に言いたい事は書いていません。だけど日本にしばらく住んだら「ちょっと」のいろいろなニュアンスをちょっと分かるようになりました。

（1999年９月～2000年７月　交換留学生として受入れ）

（右端が筆者）

留学生のこえ
FOREIGN STUDENTS' VOICE

一番楽しい日本の経験

The Voice

UNITEC インスティチュート・オブ・テクノロジー
ミランダ ドナルドソン

こんにちは！ニーハオ！アンニョンハセヨ！Hi everbody!

私はマンディと申します。ニュージーランドのユニテック工科大学の三年生で二十歳です。

私が日本に来たのは、今回で三度目ですが、熊本での生活は私にとって今までで一番楽しい経験になりました。私はニュージーランドと熊本学園大学の初めての交換留学生でした。私は９月５日から12月18日まで熊本学園大学に留学しました。

来る前は、すごく心配していました。どんな人と一緒に住むかとか、他の留学生と仲よくなれるかとか、勉強は難しすぎないか、などです。心配のあまりに短期留学に決めました。

でも、思ったのとぜんぜん違いました。私の三カ月半の滞在で楽しくなかったことはぜんぜんありませんでした。始めはちょっと心細かったけど、すぐにルームメートの幸（ゆき）と仲よくなって、あまりホームシックになりませんでした。日本人と一緒に住むことは名案です。日本語の勉強にとてもいいと思います。熊本学園大学国際交流会館で一緒に住んでいた日本人はすごく親切な人でした。皆は色々なことを手伝ってくれました。私にとって寮に住むのは初めてだったけど、すごくいい経験になりました。色々な人と過ごしたら、たくさん面白いことを習います。他には、世界中の友達ができるようになります。

寮に入ることについても心配していました。一緒に住む留学生は皆面白くなくてださいだろうと思っていました。日本語を勉強している他の国の人達は、皆勉強ばかりする人と思っていました。でも、それは大きな間違いでした。皆は私とだいたい同じ性格なので、とても楽しかったです。寮の皆はいい人だと思います。皆と一緒に飲みに行ったり、ぶらぶらしたり、色々な所を見物したりしたのはとてもいい経験だったと思います。

熊本にいる間に色々なことをしました。私は小さい国から来たので、東京などの町はこわい感じがしますが、熊本はきれいな上に私にとって過ごしやすかったです。水前寺公園とか熊本城などの観光名所も多すぎないし、町の大きさもちょうど良いと思います。

他には、留学生は遠足などに行く機会がいっぱいあります。小中学校に行ったり、子供と遊んだり、祭りに出たりしました。外国人にとって日本にいるのは時々スターのような気持ちです。けれども、時々いやなこともあるので、我慢したくなくなる時もありますが、怒らせないように舌をかんで我慢した方がいいです。

学園大でも、色々参加できることがあります。スポーツ大会と学園祭はとても楽しかったです。私はスポーツが大嫌いですが棒引きに出て、面白かったです。

私の一番好きな勉強はビデオを作ることでした。先生にビデオを作る事を言われ、熊本市と熊本学園大学についての説明を録画しました。とても楽しかったです。勉強のためだけではなく、良い思い出にもなりました。そのビデオを何回見ても今だに笑いころげてしまいます。デーブの俳句と忍者の事とか、アーロンの世界旅人の事とか、レーチェルと一緒にベルベティス・ペンティウス先生について話をした事とか、かわいいフィリップの事とか、面白いリチャードの事とか、おかしいエディの事とか、三坂のタイタニックの事とか、和の最高のバイクの事とか、私が大好きな幸の笑い方などを見たら、ぜったい笑ってしまいます。

日本に来る前とニュージーランドに帰る前の気持ちはぜんぜん違いました。帰る時には、あまり帰りたくなくて、もっと熊本で過ごしたいと思いました。来る前は心配のあまりに、短い留学に決めましたが、帰る時には、一年間にしたら良かったと後悔しました。

これから先、熊本の経験を思い出したら、きっと笑うでしょう。日本語を習った上に、色々おかしくて変な思い出ができたからです。

他の人はこのような機会があまりありません。私にとっても一生に一度の機会だったので、とてもありがたかったです。私を助けてくれた人達皆に、とても感謝しています。

皆さん、本当にありがとうございました。皆さんと過ごしたり、遊んだりした三カ月半は最高の経験です。

皆によろしく！また、いつか会いましょう！

お世話になった土山さん、野口さん、野田さん、田中さん、吉住さん、フランキーさん、うめだ先生、ひらい先生、福山先生に心より感謝いたします。ありがとうございました。

マンディより。

実乱多　土鳴怒尊

（1999年９月～12月　交換留学生として受入れ）

（左が筆者）

日本が大好きになりました。

アルスター大学
フィリップ・ドハーティ

ぼくはフィリップ・ドハーティです。北アイルランドからの留学生です。昨年の9月に熊本学園大学に来ました。もうすぐ、北アイルランドへ帰らなければなりません。今年の9月から、アルスタ大学にもどります。けれども、アイルランドへ帰りたくないです。熊本にいたいです。なぜなら、ぼくは日本が大好きだからです。

日本の人はいい人です。熊本学園大学の人はとてもいい人です。ぼくの日本語の先生はとてもいい先生で、英語のゼミの先生も、それから、国際交流センターのみなさん、国際交流会館の野口さんとフランキーさん、みんなとてもしんせつでした。ぼくがこまっている時たすけてくれました。大学の授業はとてもおもしろくてentertainingだと思います。

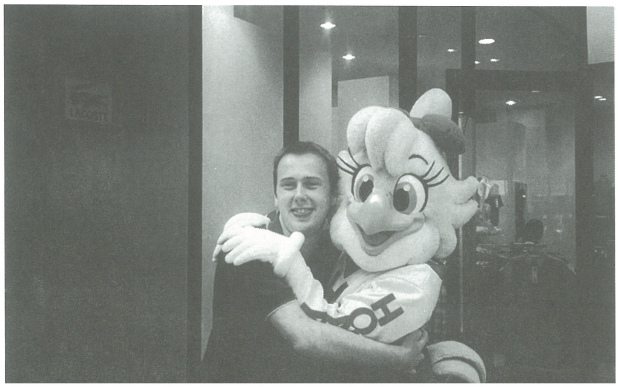
りょうでも、たくさんいい友達ができました。みないっしょにたのしいことをしました。毎週、ぼくたちはサンクチュアリーやシャーク・アタックやフェスタのプリクラボックスへ行きました。時々、カラオケへ行きました。みなさんはぼくがひどいオンチだと言いました。そして、マイクを貸してもらえませんでした。ぼくは、自分では上手だと思うんだけど…。それで、カラオケは楽しくなかったです！

だけど、熊本で、ぼくは本当に楽しい時間をすごしました。

日本の物とサヨナラするのはとても寂しいです。いつかきっと日本に帰って来ます。その日のために帰ってからも、日本語の勉強をつづけます。今、ぼくの日本語はチョウヘタですが上手になりたいです。

皆さん、ありがとうございました。

（1999年9月～2000年7月　交換留学生として受入れ）



留学生のこえ FOREIGN STUDENTS' VOICE

忘れ難い、日本。

The Voice

深圳大学　吴　蔚　彬

「桜」、「舞妓さん」、「三味線」等々、小さい頃から心に留まった日本に対するイメージと「現代化」という抽象的な感覚を抱いて、不安におそわれ、ドキドキしながら日本に来ました。

日本に着いた翌日、私はわくわくでしびれを切らし、自転車で寮の周辺の様子を見に出かけるつもりでしたが、つい道草を食って、遠くまで行ってしまいました。帰ろうと思った時、やっと道に迷ったことに気づきました。その時の心細さと言ったらありません。どうしようもなく、三年前に勉強した片言の日本語を使って、お店の人に帰り道を尋ねてみましたが、彼は早口でさっぱり聞き取れませんでした。結局、道順を書いてもらいました。客ではない私のために、そんなに時間をつぶして、詳しく説明してくれるとは思っても見ませんでした。人々の優しさは私に日本の３月を暖く感じさせました。

夏休みの時、北海道国際交流センター主催のホームステイに参加し、涼しい北海道で２週間ゆったり過ごしていました。ホストファミリーのお母さんはもう六十過ぎ、専業主婦ですが、元気一杯で、毎日腕によりをかけて、さまざまな和風料理を食べさせてくれたり、函館の夜景を見に連れて行ってくれたりしました。このボランティアの仕事は20年も続けてきているということを聞いた瞬間、腰を抜かすほど驚きました。国際交流に楽しんでいるお母さんの姿を見て、尊敬の気持ちで胸が一杯になりました。一方、日本に漂っている現代社会の豊かさが少しでもわかったような気がします。グローバリズムの今日に中国ももっとがんばらなければならないと思っています。

また、若者は異文化からの受容性を持っているのも印象的です。一つの例を取り挙げてみたら、一目瞭然になると思います。私と日本人のルームメートとの話しです。だんだん親しくなってきた私たちにとって、深夜まで話し合うのは珍しくありません。ある日、話しの調子に乗って、つい戦争の話題にぶつかりました。相手の涙だらけの顔が目に映ったとたん、息が止まったままでした。いくらつらくても、異文化への理解を深めようとする気持ちにすっかり心を打たれました。

さまざまな人々と触れ合っているうちに、この土地の力が少しずつ味わえてきました。数え切れない断片で綴られたこの一年間は私にとって掛け替えのない宝くじです。大事にして行って、きっとこれから日々の生活の中で、知らない間に役に立っていくものだと思います。

（1999年４月～2000年３月　交換留学生として受入れ）

（左端から２番目が筆者）

良かった

The Voice

大田大学校　劉　眞福

私が習った日本語の中で、知って良かったという言葉は「良かった」という事です。本当に良かったです、留学をして。良かったです、日本に来て。そして交換留学生で留学ができて神様に感謝します。昨年は自分なりにとても忙しかった一年です。そして興味深かった日々でした。夏休みになっても、冬休みになっても、留学の一日が惜しくて帰れなかったぐらいと言えば私の気持ちが伝えられるでしょうか。

留学の中でいろんなでき事がありました。また、以前私が想像もできなかった出来事に遭遇した時には感動が共にありました。その一つがいつか「外国に行ったら誰でも障害者」というテーマで発表したように自分が言葉と文化の違う異国での生活を通して、言葉では表せない何かに遭遇した事です。何年間、社会福祉を専攻しながら頭で理解しようとした事を体で感じました。

そして、想像も出来なかったことに遭遇してきたいろんな出来事は更に私の考え方を変えました。96年初めて熊本学園大学に３週間の語学研修で来て、それがきっかけになって交換留学の夢を見ることになってから、自分なりに一生懸命に準備し計画を立ててきたのに、にもかかわらず実際留学はそうじゃなかった事です。以前、予想していた事が、本で読んできたことが、また自分の見る目が違ってきました。最初は落ちつかない理由になったが、だんだんこれが留学の魅力ではないかと思うようになりました。

実際してみないとほんとの姿を知るのはとても難しい、いいえ、出来ないと思います。ただ近づいていくだけではないでしょう。私の留学に対してもいろいろな人の目があります。例えば、よく頑張ってるねと言いながら私の事を助けてくれる日本の人々がいるし、そんな私が独立して自分の勉強がしたい弟や、新しい世界への興味深い友達ウンヒには私は憧れの対象であり、また女はいい男に会ってお嫁さんになるのが何とかんとか言っても一番だと言ってる祖母には世間知らずに間違えないでしょう。面白くないですか。本当の事は言われ無さそうです、いつも一部分しか。もちろん、これは誰でも分かってると思います。でも私はその事に対して真剣に悩みました。自分の文化の目で日本の社会がどうか、とか自分が見た、読んだ、感じた事がその物の全部であるように、勝手に判断したりする自分が、あるいは今の社会が徹夜しながら討論になる話題でした。

何時か、車椅子に乗っている友達にある人が“もし歩けるんだったら一番何がしたいんですか”と聞きました。失礼だなと思う時“私は夢でも歩くことを見たことがありません”と友達は答えました。そうです、友達には車椅子が当たり前で、その人には歩くのが当たり前だったのです。ただ、歩き方の違いなのに、一方の判断が基準になっているではないでしょうか。私はその友達が大好きです、お互い自分の世界を見せながら楽しんでる中、心強くなるのです。

私が専攻した社会福祉学は人を対象としてする学問であり、老人福祉、障害者福祉、児童福祉などの区分があります。問題を解決する為の学問のように感じられる時があります。確かに私も社会問題の解決に役に立ちたいと思って学科を選びました。でも、留学をしながらその目的、自分の学問に対する態度が変わりました。私が経験したことがない世界を持っている彼らが、私が知らない世界を知っている彼らが知りたいです。短所ばかりだとは想像できません。

私が留学生だから友達の好奇心の対象になったりします。私も自分にとって外国人であるから関心がもっと深まると思います。もちろん、どんなに知りたくても私は日本人になれません。でも、私と違う世界を持っている友達が好きです。お互いに合わせている姿が好きです。私が知らない世界を持っているお祖父さんお祖母さんが、今知ろうとしても知れないその世界が好きです。きっと何かが隠してあるでしょ！これを考えるともっともっと勉強がしたくなります。私は留学してよかったです。

P.S. 色々な事で悩んだ時に相談に乗ってくれたり、真剣に力になってくださった先生や友達、国際交流センターの皆さんにありがたい気持ちを伝えたいと思います。

どんなにきつい時にあっても、皆さんが私の側に居ることは‘やはり自分は幸せな人だな’と感動を持つようにしてくれました。皆さんが居るからこそ私の留学が“よかった”が付けると思います。

（1999年４月～2000年３月　交換留学生として受入れ）

（中段右端から２番目が筆者）

留学生のこえ
FOREIGN STUDENTS' VOICE

今度、よろしい

The Voice

経済学部　国際経済学科
蒋　益　鳴

大学２年生になって、危機感が出ました。

２年前、自分がどこまで出来るのか、自分とチャレンジをしようと思って日本に留学する事を決めました。日本に来た当初の目標は、日本語能力試験１級と統一試験を受けて大学の入学試験に合格することでした。言葉はもちろん家から学校までの通学など生活習慣全般にわたり、大変でした。

その結果大学１年生になり新しい留学環境で、日本の学生さんと一緒に授業を受け、そして試験に挑み、まさに「必死に勉強する」というチャレンジが出来ました。私にとってとても新鮮な１年間を過ごしました。

今年大学２年生になった私は、大学の環境にも慣れ始めました。授業に出席し、図書館、情報センターに行き、そして家に帰るという日々を送っています。

ある日、エレベーターの前でＡ先生に会って：「先生、先週すみません、ちょっと用事があって、欠席させていただきました。来週は必ず授業に出ますよ。」と、授業に寝過ごして出席出来なかった事を言い訳すると「今度、よろしい！」の一言でした。

ガッ！思わずその時の私は息がつまってしまいました。その一言を聞いたとたん、私が全身動けなくなってしまったのです。先生の反応の早さ、鋭さ、驚くほど間違いなく、私の隠したい所に差し込まれました。

ガッ！と２分間ほど動けなくなりました。静寂の後、家に帰って、先生の言葉の意味について考えてみました。「もしかしたら先生は私の怠惰を見透していたのではないだろうか。」『先生はなぜ一目見ただけでわたしの「全て」を理解できたのでしょう？』家の本棚に『熊本学園大学免許・資格取得のための手引』を手に取り、その時から教職課程を履修することを心に誓ったのです。

半年経った今では、教職の授業を受けて良かったと思っています。教育心理学、教育原論などの授業から人類の科学、技術、芸術など文化的遺産を次世代の子供達に伝える事の必要性、また歴史、地理、哲学など知識の必要性も分かるようになりました。知識や情報、自分の意志や考え、思いや感情を分かりやすく的確に伝え、他人の話や行動・サインを受けとめ、理解し、そして適切に返していく事が求められるので素晴らしい事だと思っています。

「今、英語能力は人のレベルをはかるようになっている。去年３月27日、日産自動車とRenault（仏）に提携合意…」とゼミの先生は私達に英語の重要さを教えてくださいました。IT革命に伴い情報のなかに英語の情報量が増えつつあり、英語力の重要性も理解しなければならない時代になりました。私は今では学校の英語授業や外国語研修センターや図書館の本などあらゆる物を利用し、英語力の強化に努めています。２度の学内TOEFL試験を受けてから自分のレベルはまだまだであることを分かりました。学内から海外へ行く派遣留学制度があるのを知り、国際交流センターでイギリスへの短期派遣留学を申し込みました。

素晴らしい日本の先生方と会う事が出来て良かったです。

（本学学部留学生・中国）

（中央が筆者）

2000年度出身国(地域)別外国人留学生数

国名または地域名	学部留学生					研究留学生		大学院				交換留学生	合計
	1	2	3	4	合計		計	1	2	博後	計		
中国	10	7	5	4	26	4	4	2	9	1	12	3	45
韓国						1	1					4	5
台湾	1				1							1	2
アメリカ												5	5
アイルランド												1	1
イギリス												3	3
ブラジル						1	1						1
合計	11	7	5	4	27	6	6	2	9	1	12	17	62

1999年度本学留学生の奨学金受給実績

★各種奨学金受給者数の合計

学部留学生 16
大学院生 13
学部研究留学生 6
合計35名

★本学で扱った奨学金の受給状況

1.私費外国人留学生学習奨励費

	応募	採用
学部留学生	15	9
大学院生	12	5

2.熊本県外国人留学生奨学金

	応募	採用
学部留学生	6	6
大学院生	3	3
学部研究留学生	3	0

3.ロータリー壽崎奨学金

	応募	採用
学部留学生	6	1
大学院生	4	1
学部研究留学生	4	2

4.在熊外国人留学生ライオンズクラブ奨学金

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	0	0
学部研究留学生	7	4

5.ロータリー米山記念奨学金

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	4	1

6.肥後銀行国際交流奨学金

	応募	採用
学部留学生	5	0
大学院生	3	2

7.国内採用による国費外国人留学生

	応募	採用
学部留学生	0	0
大学院生	6	0

8.公益信託水野弟次郎記念留学生奨学基金

	応募	採用
大学院生	3	1

1999

DATA

INTERNATIONAL EXCHANGE DATA 1999

1999年度本学留学生への交流の主な案内

名　　称	主　　催	内　　容	期日	参加者
留学生の会	熊本 YWCA	日本の家庭紹介 各行事への案内	年間を通じ随時入会 申し込み受付	
年間　中国映画上映会	熊本県日中友好協会 青年部	年間４回の中国映画を無料で上映		
新入生歓迎ピクニック	熊本学園大学第一部 学生自治会	新入生歓迎の大学行事 （南阿蘇へのバスハイク）	4／17	多数参加
第11回 熊本県古武道演舞大会	熊本県古武道会	古武道演舞	4／29	10人参加
第12回 留学生交流会	R.1　第2720地区 ローターアクトクラブ	スポーツ交流	5／9	10人参加
第１回　スポーツ DAY ソフトバレーボール大会	熊本学園大学 スポーツデイ実行委員会	スポーツ交流と懇親会	5／30	多数参加
熊本の企業人との懇談会	熊本留学生交流推進会議	企業人を囲んでの懇談会と昼食会	6／26	２人参加
キャンプ交流会	九州青年の船 OB・OG （現在 YOUNG NETWAORK）	九州青年の船（OB・OG）との交流会（韓国人留学生）	6／26～ 6／27	３人参加
第12回 JAPAN　TENT 世界留学生交流いしかわ '99	JAPANTENT 開催委員会	石川県民、学生との交流、ホームステイ	7／30～ 8／6	
第２回スポーツ DAY ドッヂボール大会	熊本学園大学 スポーツデイ実行委員会	スポーツ交流と懇親会	7／20	11人参加
甲佐町平成11年度 国際交流企画	甲佐町教育委員会	甲佐町の皆さんとの野外キャンプと「鮎まつり」参加	7／25	３人参加
火の国まつり	熊本市	おてもやん総踊り参加	8／12	
第21回北海道国際交流のつどい	北海道国際交流 センター	ホームステイ、地域交流、学校交流	8／15～ 8／29	２人参加
宮原小学校訪問交流	小国地球人物語21 宮原小学校	宮原小学校子供たちとの登山と交流会	9／11～ 9／12	３人参加
第６回米国人留学大学生との交流会	熊本日米協会	懇親会	10／18	６人参加
熊本市お城祭り	小池美代子先生 日本現代和装研究会	和服の着付け体験と野点	10／3	５人参加
スポーツ交流会	熊本学園大学学生議会	本学日本人学生と留学生とのスポーツ交流会	11／20	
フィールドトリップイン熊本	熊本市国際交流振興事業団	清和村文楽館・通潤橋	11／23	４人参加
スポーツ交流会	熊本学園大学学生議会	本学日本人学生と留学生とのスポーツ交流会	10／3	多数参加
イヤーエンドパーティー	熊本市国際交流振興事業団	市民とのパーティー交流	12／17	多数参加
成人式への参加	小池美代子先生 日本現代和装研究会	和服の着付け体験	1／10	５人参加
留学生料理交流会	熊本城東 ローターアクトクラブ	会員と料理を作っての交流会	1／30	７人参加
在熊留学生の主張	熊本グリーンロータリークラブ	在熊留学生の日本語弁論大会	2／5	４人参加
第18回熊本春節祝賀会	熊本県日中協会	中国春節パーティー	2／15	18人参加
第１回熊本 YEG 杯ふれあいボーリング大会	熊本商工会議所青年部	青年部会員との懇親会	2／16	７人参加
第15回 国際理解懸賞作文	熊本県国際交流研究会	作文による留学生の主張	2／20	１人参加
第27回ユネスコ文化財を見る会	熊本ユネスコ協会	熊本の文化財見学（田原坂鹿央装飾古墳など）	3／12	２人参加
異文化理解教育	帯山西小学校 詫麻原小学校 大江小学校	県内の小学校を訪問しての異文化理解教育	11／26 11／ 2／9	２人参加 ６人参加 ３人参加

熊本学園大学
KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY
〒862-8680　熊本市大江２丁目５番１号
電話(096)364-5161
http:/www.kumagaku.ac.jp

国際交流レター vol.22
平成13年３月発行
発行者　熊本学園大学国際交流委員会
熊本市大江２丁目５番１号
電話(096)364-5161